

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ

鳥取県西伯郡伯耆町

SAKA CHOU BU JU RA
坂長武寿羅遺跡

SAKA CHOU DAI
坂長第8遺跡 2

2012

財団法人 鳥取県教育文化財団

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする全国的にも注目されるような古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、それらの遺跡の調査成果に基づいて、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

こうした先人が残した素晴らしい地域の遺産である遺跡を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

さて、西伯郡伯耆町において国道181号線（岸本バイパス）の道路改良工事が着々と進められているところでありますが、この事業に先立ち、当財団は、鳥取県から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

このうち、平成21年度に調査を行った坂長武寿羅遺跡では、縄文時代の落とし穴や中世の掘立柱建物などが発掘され、平成22年度に調査を行った坂長第8遺跡からは縄文土器をはじめ、遺跡付近に存在が推定される相見郡衙に関連するであろう古代の土器、瓦、木製品など多彩な遺物が出土し、この地域の歴史を解明するための貴重な資料を確認することができました。そして、このたび、それらの調査結果を報告書として上梓するはこびとなりました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるに当たり、鳥取県県土整備部、鳥取県西部総合事務所県土整備局並びに地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成24年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理事長 井上善弘

例 言

- 1 本報告書は、鳥取県の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団が、一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成21・22年度に行った坂長武寿羅遺跡、坂長第8遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本報告書における方位は公共座標北を示す。坂長武寿羅遺跡、坂長第8遺跡の真北は、座標北に対し、約32' 34"、約32' 49"東偏する。なお、X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。標高は、海拔標高を示す。
- 3 本報告書に掲載した地形図は、岸本町（現伯耆町）発行の1/2,500地形図「岸本町全図」、および国土地理院発行の1/50,000「米子」を使用した。
- 4 本調査にあたり、調査前測量、出土遺物の自然科学分析及び保存処理を業者委託した。
- 5 本報告書に掲載した遺構と遺物の実測及び浄書は財団法人鳥取県教育文化財団調査室岸本調査事務所で行った。
- 6 本報告書で使用した遺構及び遺物写真は文化財主事が撮影した。
- 7 本報告書の執筆は第4章の記述を玉木、それ以外を野口が行った。編集は野口が行った。
- 8 発掘調査によって作成された図面及び写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
- 9 現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々、機関に御指導、御協力いただいた。明記して深謝いたします。

（五十音順 敬称略）財団法人米子市教育文化事業団、西部土地改良区、鳥取県教育委員会、伯耆町教育委員会

凡 例

1 遺物の注記における遺跡名には「ブジュラ」「サカ8」を略号とし、合わせて「遺構名、遺物番号」を記入した。

2 本報告書で用いた遺構の略号は以下のとおりである。

SB：掘立柱建物 SS：段状遺構 SA：盛土遺構 SK：落とし穴 SD：自然流路 P：ピット

3 発掘調査時における遺構番号と報告書記載時の遺構番号を一部について変更したものがあある。新旧の遺構名と番号対照表は下表に示した。

坂長第8遺跡遺構番号新旧対照表

新	旧
SD2	SD1

4 遺物実測図の縮尺については、特に説明がない限り以下のとおりである。

土器、土製品、瓦：1/4、1/6、石器：2/3、1/2、1/3、玉類：1/1、金属製品：1/2、木製品：1/4

5 本書における土層色調及び土器色調は、『新版 標準土色帳』による。

6 遺物実測図に用いたトーン及び記号は、特に説明がない限り以下のとおりである。

■：土器赤彩、被熱範囲 ■：土器・木製品漆塗布、煤付着範囲、発泡範囲

■：ガラス質滓化範囲

7 遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、それ以外のものは白抜きで示した。

8 遺物観察表等の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。

9 本報告書における遺構及び遺物の時期決定は下記の参考文献に基づいている。

参考文献

清水真一1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編一』木耳社

巽淳一郎他1983 『伯耆国庁跡発掘調査概報（第5・6次）』倉吉市教育委員会

中森 祥2006 「鳥取県における中世後期土師器の展開」『調査研究紀要1』鳥取県埋蔵文化財センター

目次

序

例言

凡例

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯……………1

第2節 調査の経過と方法……………2

(1) 調査区の名称と調査方法 ……2

(2) 調査の経過 ……2

第3節 調査体制……………3

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境……………5

第2節 歴史的環境……………5

第3章 坂長武寿羅遺跡の調査

第1節 調査の概要と層序……………11

第2節 1区の調査成果……………11

第3節 2区の調査成果……………12

第4節 包含層出土遺物……………17

第4章 坂長第8遺跡の調査

第1節 遺跡の立地と層序……………18

第2節 調査成果……………21

第3節 包含層出土遺物……………23

第5章 坂長第8遺跡の自然科学分析

第6章 総括

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	調査地位置図	1	第15図	SA 1・2	16
第2図	遺跡位置図	5	第16図	包含層出土遺物	17
第3図	周辺遺跡分布図	7	第17図	調査区配置図	18
第4図	坂長武寿羅遺跡調査前地形測量図	9	第18図	坂長第8遺跡遺構配置図	19
第5図	坂長武寿羅遺跡遺構配置図	10	第19図	SD 2	20
第6図	1区基本層序	11	第20図	SD 2 出土遺物①	21
第7図	2区基本層序	11	第21図	SD 2 出土遺物②	22
第8図	SK 1	12	第22図	包含層出土遺物①	24
第9図	SK 2	12	第23図	包含層出土遺物②	25
第10図	SS 1 出土遺物	12	第24図	包含層出土遺物③	26
第11図	SS 1	13	第25図	包含層出土遺物④	27
第12図	SS 2	14	第26図	包含層出土遺物⑤	28
第13図	SS 2 出土遺物	14	第27図	包含層出土遺物⑥	29
第14図	SB 1	15	第28図	包含層出土遺物⑦	30

挿表目次

表1	遺物試料一覧	31	表7	坂長第8遺跡土器観察表	37
表2	放射性炭素年代測定結果	32	表8	坂長第8遺跡瓦観察表	38
表3	暦年較正結果	33	表9	坂長第8遺跡石器観察表	39
表4	樹種同定結果	33	表10	坂長第8遺跡玉類観察表	39
表5	坂長武寿羅遺跡土器観察表	36	表11	坂長第8遺跡木製品観察表	39
表6	坂長武寿羅遺跡土製品・金属製品観察表	36			

図版目次

PL.1	1	坂長武寿羅遺跡調査前状況(東から)	PL.5	1区包含層出土遺物
	2	1区完掘状況(東から)	PL.6	2区包含層出土遺物
	3	SK 1 完掘状況(北から)	PL.7	1 SD 2 完掘状況(南西から)
PL.2	1	SK 2 完掘状況(北から)		2 SD 2 出土遺物①
	2	2区完掘状況(北西から)	PL.8	1 SD 2 出土遺物②
	3	SS 1・2 完掘状況(南西から)		2 包含層出土遺物①
PL.3	1	SS 2 P 1 (東から)	PL.9	包含層出土遺物②
	2	SB 1 完掘状況(東から)	PL.10	包含層出土遺物③
	3	SA 2 断面(東から)	PL.11	包含層出土遺物④
PL.4	1	SS 1・2 出土遺物	PL.12	包含層出土遺物⑤
	2	SS 1 出土遺物		

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

本調査は、平成21・22年度に一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴って実施した西伯郡伯耆町坂長地内の工事予定地に所在する坂長武寿羅遺跡、坂長第8遺跡の発掘調査である。

坂長武寿羅遺跡は「周知の埋蔵文化財包蔵地」ではなかったが、現況で丘陵斜面に平坦部、および土塁状の高まりが認められ、また周辺には相見郡衙に関連する遺跡をはじめ、多くの周知の遺跡が存在する。そのため、道路建設工事に先立ち、伯耆町教育委員会が国（文化庁）及び県の補助金を受けて平成21年度に、試掘調査を実施した。その結果、古代の須恵器などの遺物がまとまって出土したことから、古代の遺跡である可能性が想定された。また、坂長第8遺跡も、道路建設工事に先立ち、伯耆町教育委員会が国（文化庁）及び県の補助金を受けて平成17年度に試掘調査を実施したところ、古墳時代の土師器、須恵器などが出土し、古墳時代の遺跡の可能性が想定され、平成18年度に今回の調査区の隣接地を調査した結果、古墳時代の竪穴住居跡などが確認されている。

上記のことから、鳥取県県土整備部、鳥取県西部総合事務所県土整備局と鳥取県教育委員会事務局文化財課は遺跡の取り扱いについて協議を行い、現状保存は困難であり記録保存を行うとの結論にいたった。この結論に基づき、鳥取県西部総合事務所長は、文化財保護法94条の規定に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会教育長に提出し、事前発掘調査の指示を受けた。そのため、鳥取県は発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。そこで、当財団理事長が鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法92条の規定に基づく発掘調査の届出を提出したうえで、当財団調査室岸本調査事務所が平成22年2月から調査を実施した。



第1図 調査地位置図

第2節 調査の経過と方法

(1) 調査区の名称と調査方法

坂長武寿羅遺跡は、越敷山から派生する丘陵尾根部とその東側斜面に存在する平坦部を調査範囲とした遺跡で、尾根部を1区、斜面平坦部を2区として調査を行った。標高およそ70mに立地する。

調査地の基準点及び方眼測量については、世界測地系公共座標第V系に載るように、調査区内に10m方眼の基準杭を設定し、グリッドを設けた。グリッド名は、東西南北軸交点の北東側杭名の名称である。座標は、東端のB6杭(X: -68760m、Y: -85130m)、西端のB2杭(X: -68760m、Y: -85170m)などとなった。表土、遺物包含層及び遺構などの掘削は人力で行い、排土はベルトコンベアーを用いて、隣接地に集積した。

坂長第8遺跡は、越敷山から派生する丘陵とその北側に広がる長者原台地に挟まれた谷部に位置する。調査地は平成18年度調査区と平成23年度調査予定の調査区の北側に隣接する。調査地は南側の丘陵裾部を1区、北側の谷部を2区とし調査を行った。

調査地の基準点及び方眼測量については、世界測地系公共座標第V系に載るように、調査区内に10m方眼の基準杭を設定し、グリッドを設けた。グリッド名は、東西南北軸交点の北東側杭名の名称である。座標は、調査区中央B3杭(X: -68370m、Y: -85780m)、西端のB2杭(X: -68370m、Y: -85790m)などとなった。

両遺跡とも検出した遺構及び遺物の記録には、光波トランシット及び自動レベルを用い、簡易遣り方測量及び光波トランシットによる座標測量を行った。現地での写真撮影は35mm判、ブローニー(6×7)判カメラにより地上又は写真用組み立て足場上から行った。遺物写真撮影は、ブローニー(6×7)判及び4×5判カメラを用いた。いずれも白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用した。また、デジタルカメラも適宜使用した。

(2) 調査の経過

坂長武寿羅遺跡の調査は、平成22年2月9日から発掘作業員を稼働し、2月22日まで人力による表土剥ぎ作業を行い、それと併行して2月1日から業者委託により調査前地形測量並びに方眼測量を行った。

1区、2区とも2月23日から遺物包含層の掘削を開始し、3月3日に遺構検出作業を行った。3月5日に2区でSB1、SS1、3月11日に1区でSK1、SK2などの検出、調査及び記録作業を行い、3月19日に現地でのすべての作業を終了した。

調査の結果、縄文時代から中世までの落とし穴2基、段状遺構2基、掘立柱建物1棟及び盛土遺構2基を確認した。調査面積は740㎡となった。

坂長第8遺跡の調査は、平成22年6月14日から発掘作業員を稼働し、6月22日まで人力による表土剥ぎ作業を行い、併行して6月21日に方眼測量を行った。

2区では6月22日から遺物包含層掘削を開始し、7月16日にSD2を検出し、調査を行った。また、1区では遺構は確認されなかった。7月26日に調査後地形測量など、現地でのすべての作業を終了した。

第3節 調査体制

平成21年度

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博充

事務局長 中村 金一

事務職員 岡田美津子（兼務 調査室事務職員）

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室長 松井 潔（鳥取県教育委員会 派遣）

次長 石本 富正

事務職員 岡田美津子

福田早由里

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室 岸本調査事務所

所長 國田 俊雄

文化財主事 湯原 敬雄（鳥取県教育委員会 派遣 坂長武寿羅遺跡1区調査担当）

高橋 章司（鳥取県教育委員会 派遣 坂長武寿羅遺跡2区調査担当）

野口 良也（鳥取県教育委員会 派遣 坂長武寿羅遺跡1区調査担当）

平成22年度

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 井上 善弘

事務局長 漆原 貞夫

事務職員 岡田美津子（兼務 調査室事務職員）

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室長 松井 潔（鳥取県教育委員会 派遣）

次長 石本 富正

事務職員 岡田美津子

福田早由里

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室 岸本調査事務所

所長 國田 俊雄

文化財主事 高橋 章司（鳥取県教育委員会 派遣 坂長第8遺跡調査担当）

野口 良也（鳥取県教育委員会 派遣）

馬路 晃祥（鳥取県教育委員会 派遣）

平成23年度

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 井上 善弘

事 務 局 長 漆原 貞夫

事 務 職 員 岡田美津子

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室 長 松井 潔（鳥取県教育委員会 派遣）

次 長 石本 富正

事 務 職 員 福田早由里

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室 岸本調査事務所

所 長 國田 俊雄

文 化 財 主 事 野口 良也（鳥取県教育委員会 派遣）

玉木 秀幸（鳥取県教育委員会 派遣）

馬路 晃祥（鳥取県教育委員会 派遣）

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

坂長武寿羅遺跡、坂長第8遺跡は、鳥取県西部、西伯郡伯耆町坂長に所在する。

周辺の地形および地質は、日野川を挟んで大きく様相を変える。日野川の右岸は主に、大山のさまざまな火山噴出物からなる緩やかな台地で、第四紀更新世に形成された。一方、今回調査した遺跡が位置する日野川左岸は主に、標高270mの高塚山と標高226mの越敷山を中心とした南北8km東西3kmにわたる起伏に富んだ丘陵地帯と、長者原台地と呼ばれる平坦な洪積台地とで構成される。丘陵地帯は、第三期鮮新世の粗面玄武岩を基盤とし、部分的に大山上中部火山灰に覆われている。洪積台地は、南側では安山岩質の砂礫層を、北側では火山碎屑物を主体とする古期扇状地堆積物を基盤とし、上部はやはり大山上中部火山灰で覆われている。この他に、日野川付近には、低位段丘や扇状地などの地形も見られる。なお、日野川は中世までは岸本集落の北から東北方向に流れて佐陀川に合流していたが、天文19年（1550）と元禄15年（1702）の洪水により、現在のような西寄りの流路になった。

坂長武寿羅遺跡は、越敷山から派生する丘陵先端部、坂長第8遺跡は越敷山から派生する丘陵と越敷山の北側に広がる長者原台地に挟まれた谷部に位置する。この長者原台地には相見郡衙との関連が窺われる遺跡をはじめ多くの遺跡が分布する。

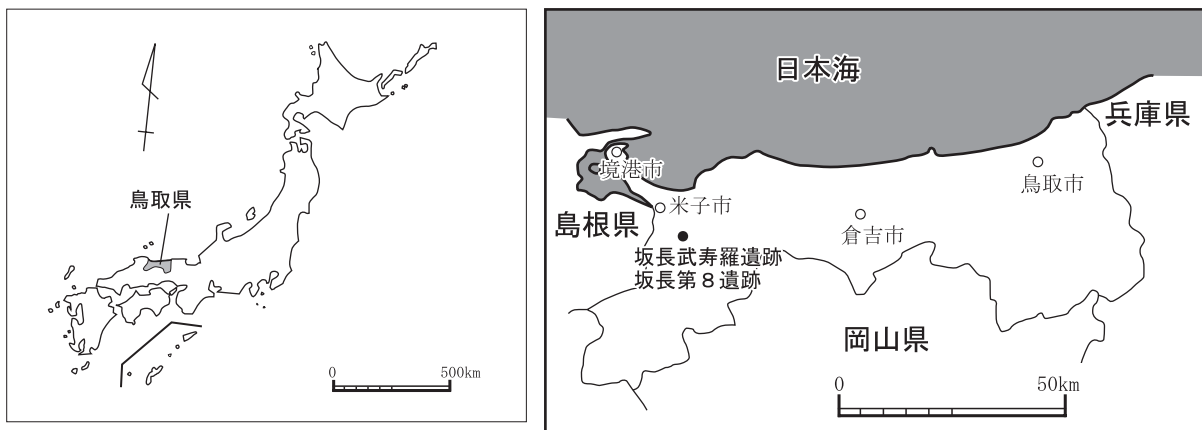
第2節 歴史的環境

旧石器時代

長者原台地上の諏訪西山ノ後遺跡（24）では、ナイフ形石器がローム層中から出土した。2点のナイフ形石器はともに珪岩製で、小型の石刃を二側縁加工したものである。坂長村上遺跡（50）からも、黒曜石製のナイフ形石器が1点出土している。この他に、泉中峰遺跡（79）と小波原畑遺跡（80）からナイフ形石器が出土しているが、石器群が原位置でまとまって出土した例はまだない。

縄文時代

坂長村上遺跡からは、多様な石材と形態の5点の尖頭器を中心とする草創期の石器群が出土した。



第2図 遺跡位置図

他に、貝田原遺跡（61）、奈喜良遺跡（20）などで、サヌカイト製有茎尖頭器が見つまっている。

早期後半から、大山西麓では押型文土器を出土する遺跡が多く知られ、上福万遺跡（73）では集石遺構や土坑が多数検出されている。前期になると、中海沿岸にも集落が形成され、目久美遺跡（8）や陰田第9遺跡（9）では、土器や石器のほか、動植物遺体が豊富に出土している。中期になって新たに出現する遺跡は少なく、後期になると再び増加する。晩期には、古市河原田遺跡（12）をはじめ突帯文土器を伴う遺跡が多く見つまっている。周辺地域では非常に多くの落とし穴が発掘されていて、妻木晩田遺跡（83）で963基、青木遺跡（22）で228基、越敷山遺跡群（45）で341基を数える。年代の判明したものでは、後・晩期の例が多い。

弥生時代

前期の代表的な遺跡としては、目久美遺跡（8）や長砂第2遺跡（4）などの低湿地遺跡がある。両遺跡では、前期から中期にかけての水田跡が重層して検出され、農耕具などの木製品も多く出土している。この時期の集落は丘陵上にもあり、宮尾遺跡（28）や諸木遺跡（29）では環壕が発掘されている。特に清水谷遺跡（17）の環壕は内部に堅穴住居等をもたない点で注目される。

中期後葉以降は遺跡数が増加し、丘陵上には、妻木晩田遺跡（83）、青木遺跡（22）、福市遺跡（21）など大規模な拠点集落が出現する。越敷山遺跡群（45）は高い丘陵上に位置する集落跡で、多数の鉄器をもつ。同時期にこの地域には四隅突出型墳丘墓が分布し、妻木晩田遺跡洞ノ原地区・仙谷地区の墳丘墓群や父原墳丘墓群などが代表である。日下1号墓（75）は木棺墓群に、尾高浅山1号墓（76）は環壕集落に隣接して築造されているのが注目される。

古墳時代

主要な前期古墳には、三角縁神獸鏡が出土した前方後方墳と方墳の普段寺1・2号墳（35）、方墳で6基の埋葬施設をもつ日原6号墳（19）がある。墳丘規模20m前後の比較的小さな古墳が多い。

中期古墳としては、全長108mの前方後円墳の三崎殿山古墳（26）が著名であるが、最近の研究では、前期古墳である可能性が指摘されている。他には画文帯神獸鏡が出土した浅井11号墳（36）、宮前3号墳（32）といった小型の前方後円墳が築造されている。

後期に入ると古墳数は爆発的に増加し、多くの群集墳が営まれる。長者原台地上では諏訪古墳群や長者原古墳群（53）などが縁辺部に、丘陵地帯には越敷山古墳群が形成される。吉定1号墳（63）の割石小口積みによる持送り式横穴式石室や、東宗像5号墳（18）の横穴式箱式棺などは、九州地方との関連性を窺わせる。終末期には、陰田横穴墓群（9）や日下横穴墓群（75）などの横穴墓が造営される。

この時代の集落遺跡は、主に台地上や丘陵上に分布し、福市遺跡（21）や青木遺跡（22）のように、弥生時代後期から継続して営まれたものが多い。坂長第8遺跡（89）では中期中葉の堅穴住居跡が3棟発掘されていて、付近に比較的規模の大きな集落跡が存在する可能性がある。

古代

白鳳期には、大寺廃寺（52）が創建される。東向きの法起寺式伽藍配置を取り、金堂の瓦積基壇と三段舍利孔を持つ塔心礎が確認されている。石製鴟尾は全国に他に1例しかない。創建時の瓦と同一文様の瓦は金田瓦窯（39）からも出土したという。長者原台地上には坂中廃寺（51）があり、塔心礎が残る。奈良末から平安初めの瓦が散布しているが、伽藍配置等は明らかでない。

『和名類聚抄』によると律令制下において周辺地域は伯耆国相見郡にあたる。長者屋敷遺跡（48）



- | | | | | | |
|------------|-------------|------------|------------|-------------|-------------------|
| 1 錦町第1遺跡 | 17 清水谷遺跡 | 33 田住古墳群 | 49 坂長下屋敷遺跡 | 65 番原遺跡群 | 81 井手勝遺跡 |
| 2 久米第1遺跡 | 18 東宗像古墳群 | 34 宮前遺跡 | 50 坂長村上遺跡 | 66 須村遺跡 | 82 今津岸の上遺跡 |
| 3 米子城 | 19 日原古墳群 | 35 普段寺1号墳 | 51 坂中廢寺 | 67 真野ブナ遺跡 | 83 妻木晩田遺跡 |
| 4 長砂第1・2遺跡 | 20 奈喜良遺跡 | 36 浅井11号墳 | 52 大寺廢寺 | 68 藍野遺跡 | 84 晩田遺跡 |
| 5 長砂第3遺跡 | 21 福市遺跡 | 37 浅井土居敷遺跡 | 53 長者原古墳群 | 69 林ヶ原遺跡 | 85 向山古墳群 |
| 6 水道山古墳 | 22 青木遺跡 | 38 天王原遺跡 | 54 坂中第5遺跡 | 70 下山南遺跡 | 86 上淀廢寺跡 |
| 7 池ノ内遺跡 | 23 樋ノ口第4遺跡 | 39 金田瓦窯 | 55 岸本大成遺跡 | 71 長山馬籠遺跡 | 87 今在家下井ノ原遺跡 |
| 8 目久美遺跡 | 24 諏訪西山ノ後遺跡 | 40 兩部太郎窯 | 56 岸本古墳群 | 72 石州府古墳群 | 88 坂長第7遺跡 |
| 9 陰田遺跡群 | 25 別所新田遺跡 | 41 荻名遺跡群 | 57 岸本遺跡 | 73 上福万遺跡 | 89 坂長第8遺跡 |
| 10 奥陰田遺跡群 | 26 三崎殿山古墳 | 42 田住松尾平遺跡 | 58 岸本要害跡 | 74 日下寺山遺跡 | 90 坂長下門前遺跡 |
| 11 新山遺跡群 | 27 天萬土居前遺跡 | 43 朝金古墳群 | 59 岸本下の原遺跡 | 75 日下古墳群 | 91 大殿狐谷遺跡 |
| 12 古市遺跡群 | 28 宮尾遺跡 | 44 朝金小チャ遺跡 | 60 久古第3遺跡 | 76 尾高浅山遺跡 | 92 坂長前田遺跡 |
| 13 吉谷遺跡群 | 29 諸木遺跡 | 45 越敷山遺跡群 | 61 貝田原遺跡 | 77 尾高城 | 93 坂長武寿羅遺跡 |
| 14 橋本遺跡群 | 30 後裕山古墳 | 46 手間要害跡 | 62 口別所古墳群 | 78 尾高御建山遺跡 | |
| 15 福成石佛前遺跡 | 31 天万遺跡 | 47 荒神上遺跡 | 63 吉定1号墳 | 79 泉中峰・前田遺跡 | |
| 16 福成早里遺跡 | 32 宮前3号墳 | 48 長者屋敷遺跡 | 64 久古北田山遺跡 | 80 小波原畑遺跡 | |

第3図 周辺遺跡分布図

や坂長第6遺跡(92)などでは大型の掘立柱建物跡が確認され、相見郡衙の施設である可能性が高い。坂長村上遺跡(50)や坂長第7遺跡(88)からも円面硯や刻書土器など、官衙的な性質が強い遺物が出土した。なお、相見駅家も付近にあったと考えられる。北方の台地上では諏訪西山ノ後遺跡(24)で和同開珎と墨などを納めた胞衣壺が、樋ノ口第4遺跡(23)で石帯が出土している。

古代山陰道は、大寺廃寺、坂中廃寺、長者屋敷遺跡を通過して、伯耆町岩屋谷から南部町天万を抜ける南側のルート、もしくは米子市諏訪から古市を抜ける北側のルートが想定されている。

『延喜式』等によれば、古代にはこの地方から鉄が貢納されていたことが知られる。坂長第6遺跡(92)では、多くの鉄滓や羽口などが出土し、郡衙に伴う官営製鉄工房として注目される。坂長村上遺跡や長者原18号墳(53)周溝上層などからも多くの鉄関連遺物が出土しており、この地方での製鉄の開始が、文献に記された年代よりも大きく遡ることは確実である。

中世

平安時代には各地に荘園が発達し、遺跡周辺は八幡荘に含まれていたとされる。

大山寺の鉄製厨子には、承安元年(1171)の火災の翌年に伯耆の豪族紀成盛が大山権現御神体と厨子を奉納したことが記されている。伯耆町坂長には紀成盛が居宅を構えたという伝承があり、坂長前田遺跡(92)では平安時代末期から鎌倉時代の甲冑に用いられた小札が出土している。

南北朝時代には大寺に安国寺が置かれた。要衝の地であり名和氏などの南朝勢力を抑える目的があったとされる。42坊を数える大寺院であったが、永禄8年(1565)に、杉原盛重に焼き討ちされた。坂中地区の旦那寺である普門寺は、元はこの安国寺の奥の院であったといわれている。

南北朝から戦国時代の動乱期には、山陰道沿いの要地を中心に、数多くの城砦が築かれた。小波城(80)、尾高城(77)、手間要害(46)は、文献にも登場する代表的な城跡である。坂長熊谷遺跡上方の字岩コゴロにも坂中丹波なる人物の陣屋があったという伝承が残る。坂中の賀茂神社の棟札には慶長4年(1599)に坂中九兵衛が建立したことが記されていて、その古宮跡は字熊谷にあるという。

近世

西伯耆は、吉川広家・中村一忠・加藤貞泰と領主交代を繰り返した末に、元和3年(1617)に、因幡・伯耆32万石を領する鳥取藩の一部として池田光政が領主になる。寛永9年(1632)国替えにより池田光仲が封入すると、周辺地域は藩の直轄領と寺社領を除いた大半が米子城主荒尾家の給所に属し、以後明治2年(1869)まで荒尾氏による自分手政治が行われた。

坂長村は、明治11年(1878)に、坂中村と長者原村が合併して成立した村である。『伯耆志』の記載によれば、安政頃の坂中村は67戸280人で、長者原村はわずか2戸12人であった。

長者原台地では、石田村吉持家により佐野川用水の開削事業が実施された。事業は元和4年(1618)から数回の中断を経ながら約250年にわたり、文久元年(1861)にようやく完成を見た。これにより、荒蕪地であった長者原台地は水田・畑地となり、現在に至っている。

【参考文献】

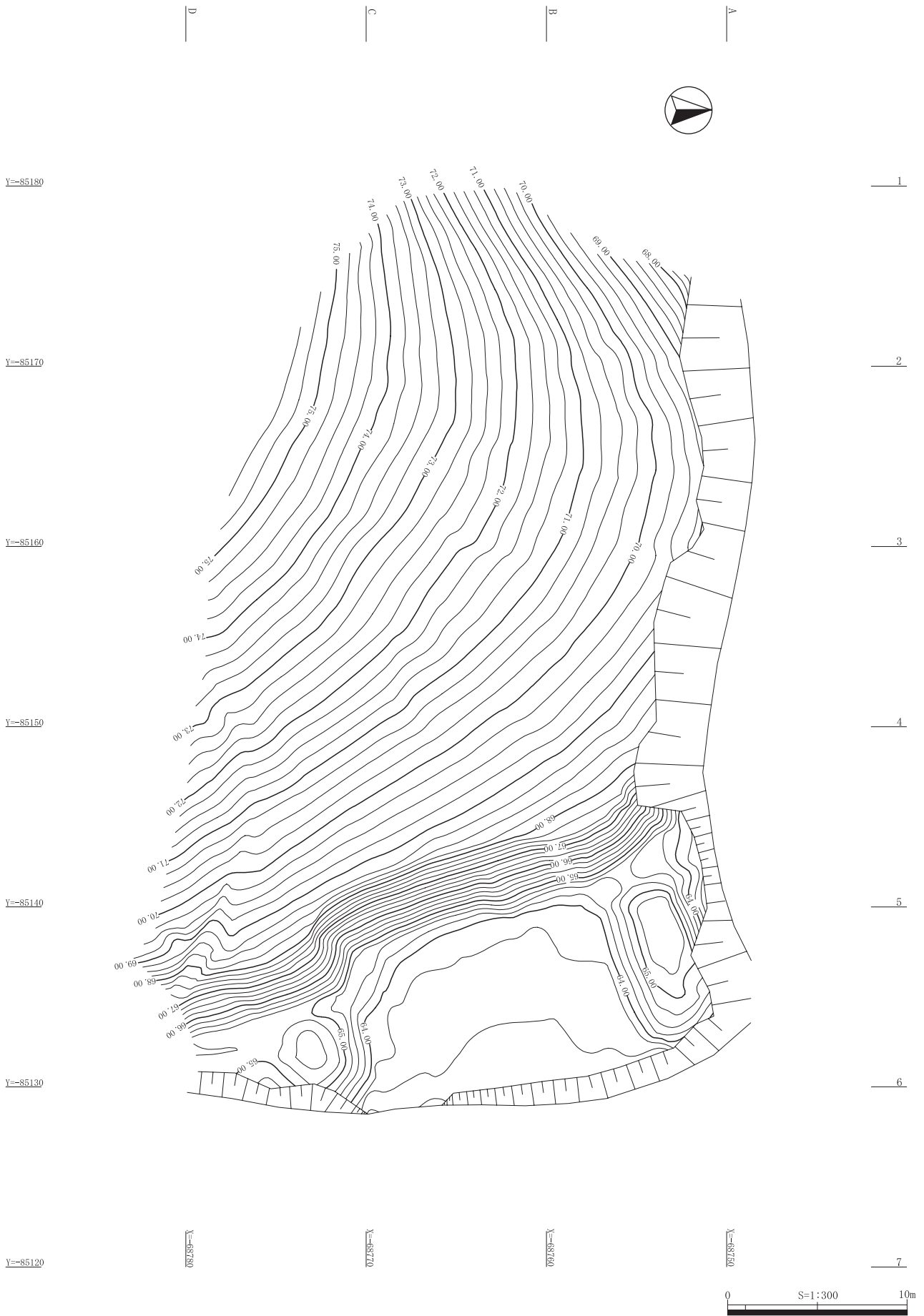
地質調査所 1962『5万分の1地質図幅説明書 米子』(岡山一第18号)

山名巖 1964「山陰地方における第四紀末の諸問題」『鳥取県立科学博物館研究報告』

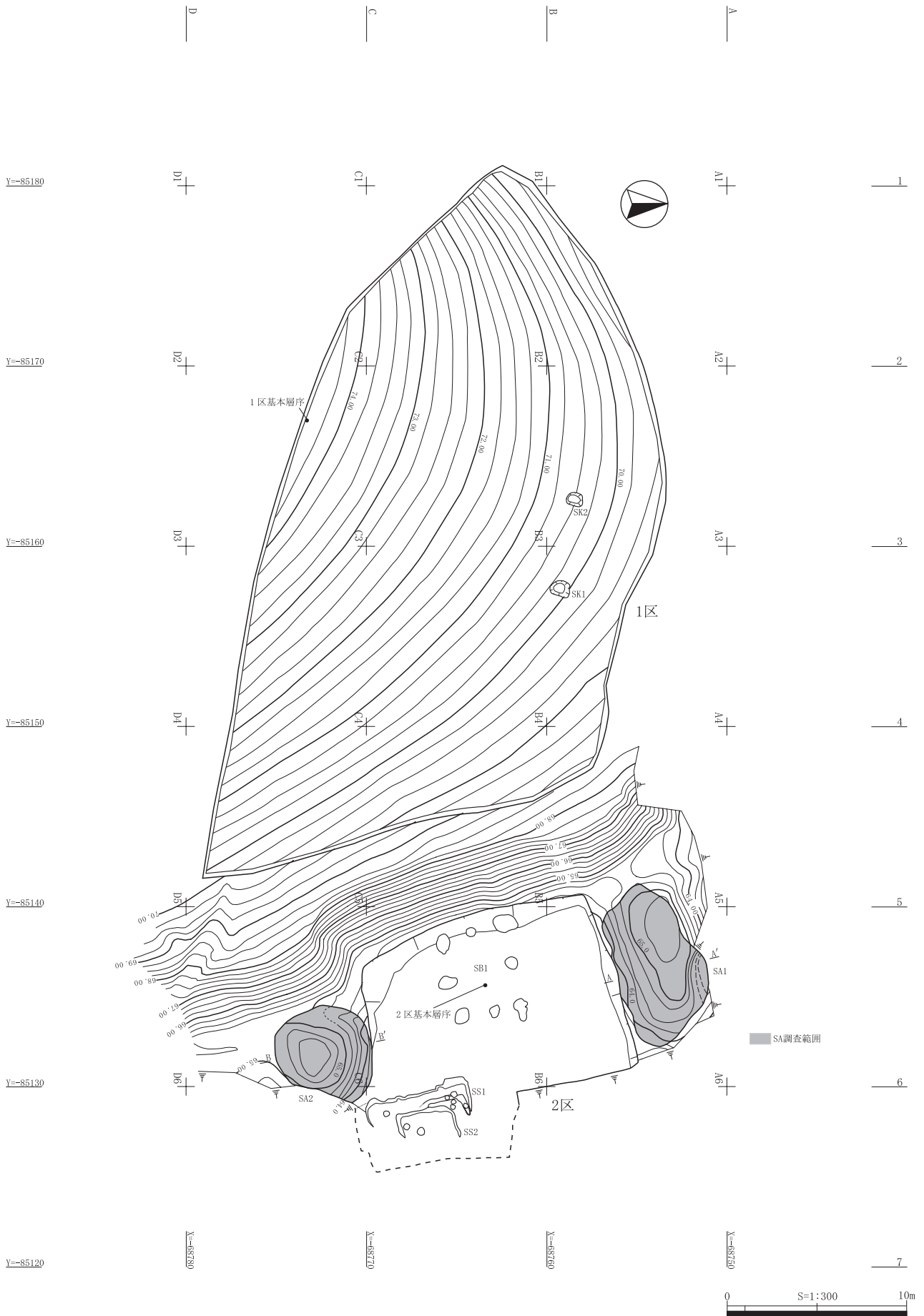
岸本町 1983『岸本町誌』

会見町 1996『会見町誌 続編』

米子市 2003『新修 米子市史』



第4図 坂長武寿羅遺跡調査前地形測量図



第5図 坂長武寿羅遺跡遺構配置図

第3章 坂長武寿羅遺跡の調査

第1節 調査の概要と層序

坂長武寿羅遺跡は、越敷山から樹枝状に派生する丘陵部に位置する。調査範囲は尾根頂部と東側斜面に存在する平坦部で、便宜的に前者を1区、後者を2区とした（第5図）。調査は平成22年2月9日から作業員を稼働して調査を開始した。

1区の基本層序は第6図の通りである。表土下に古代の遺物包含層が堆積するが、この遺物包含層上面では遺構の確認はなかった。遺構検出面は古代遺物包含層直下の地山面で、落とし穴2基を確認した。

2区では、現況において平坦面、およびその南北に土塁状の高まりが認められた。平坦面の調査では、表土下に中世末から近世頃の遺物包含層が認められ（第7図）、遺物包含層直下で16世紀後半頃の掘立柱建物が1棟確認された。土塁状の高まりも、平坦面の辺に沿って盛土がされており、平坦面造成時に排出したであろう土を互層に盛土していることから平坦面の造成に伴う盛土遺構であったと思われる。また、平坦面東側では弥生時代、平安時代の段状遺構も検出された。

第2節 1区の調査成果

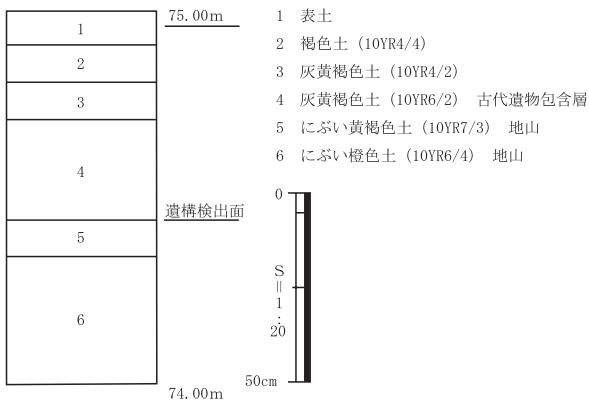
SK1（第8図、PL.1）

A4グリッドで確認された平面不整な楕円形を呈する落とし穴である。規模は長軸114cm、短軸86cm、深さ122cmを測る。また底面では長軸15cm、短軸14cm、底面からの深さ31cmの底面ピットも認められた。埋土は黒色土であるが、底面ピットの埋土は、上層に比べ、混入する地山粒の量が多い。遺物の出土はなかった。

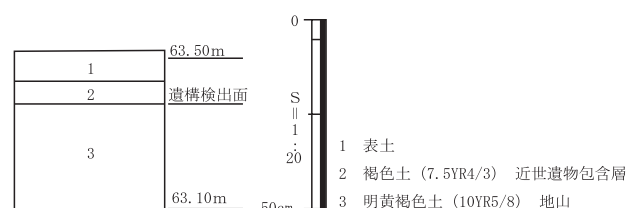
本遺構の時期は不明である。

SK2（第9図、PL.2）

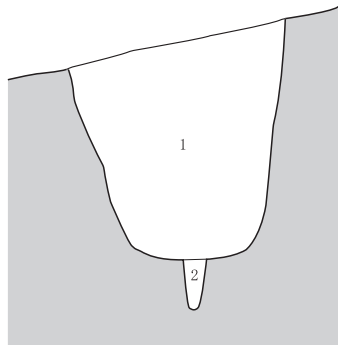
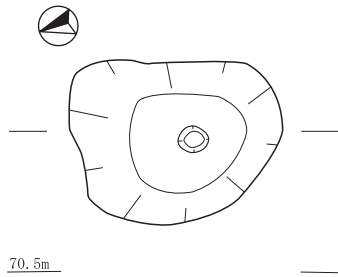
A3グリッドで確認された平面不整な楕円形を呈する落とし穴である。規模は長軸92cm、短軸74cm、深さ107cmを測り、底面では長軸31cm、短軸19cm、底面からの深さ39cmの底面ピットも認められた。埋土は上層に黒色土、下層に黒褐色土が堆積するが、下層埋土では底面ピットやその上層で串痕と思



第6図 1区基本層序

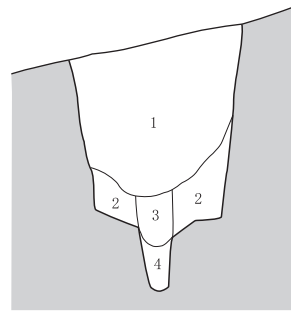
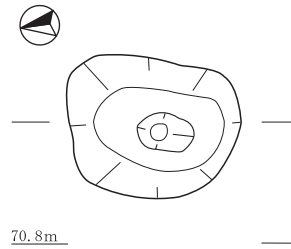


第7図 2区基本層序



- 1 黒色土 (10YR2/1) 粘性ややあり しまりややあり
下層に地山ローム粒若干混
- 2 黒色土 (10YR2/1) しまりややあり 地山ローム粒混

第8図 SK1



- 1 黒色土 (10YR2/1) 粘性ややあり しまりあり
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性ややあり しまりややあり 地山ブロック混
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) しまりあまりなし 地山粒若干混
- 4 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性ややあり 地山ブロック混

第9図 SK2

われる埋土の状況も確認できた。

遺物の出土はなく、本遺構の時期は不明である。

第3節 2区の調査成果

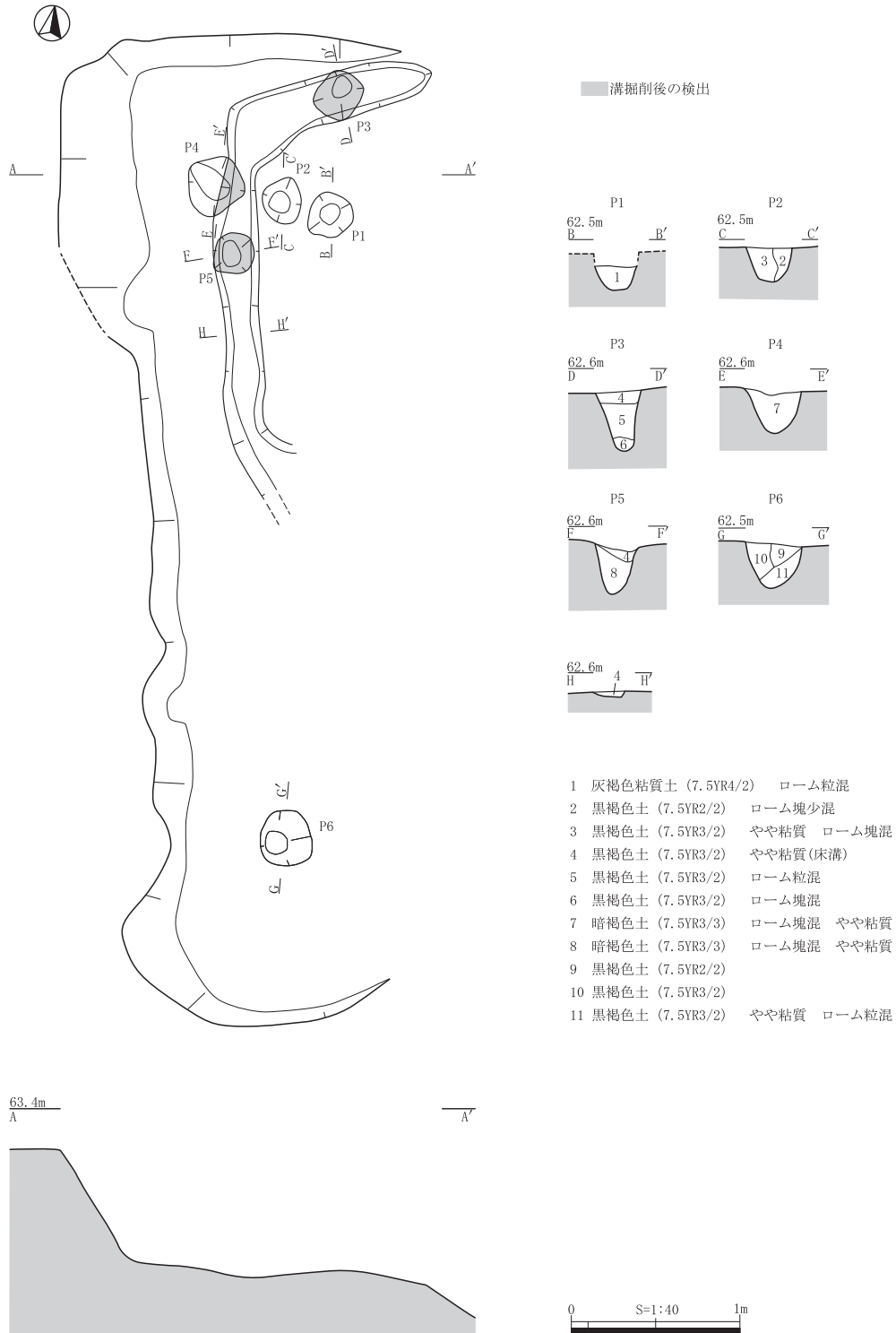
SS1 (第10・11図、PL.2・4)

B7グリッドで確認された段状遺構である。確認した規模は長軸5.8m、短軸2.2m、深さ80cmを測るが、床面中央部分はSS2によって掘削される。



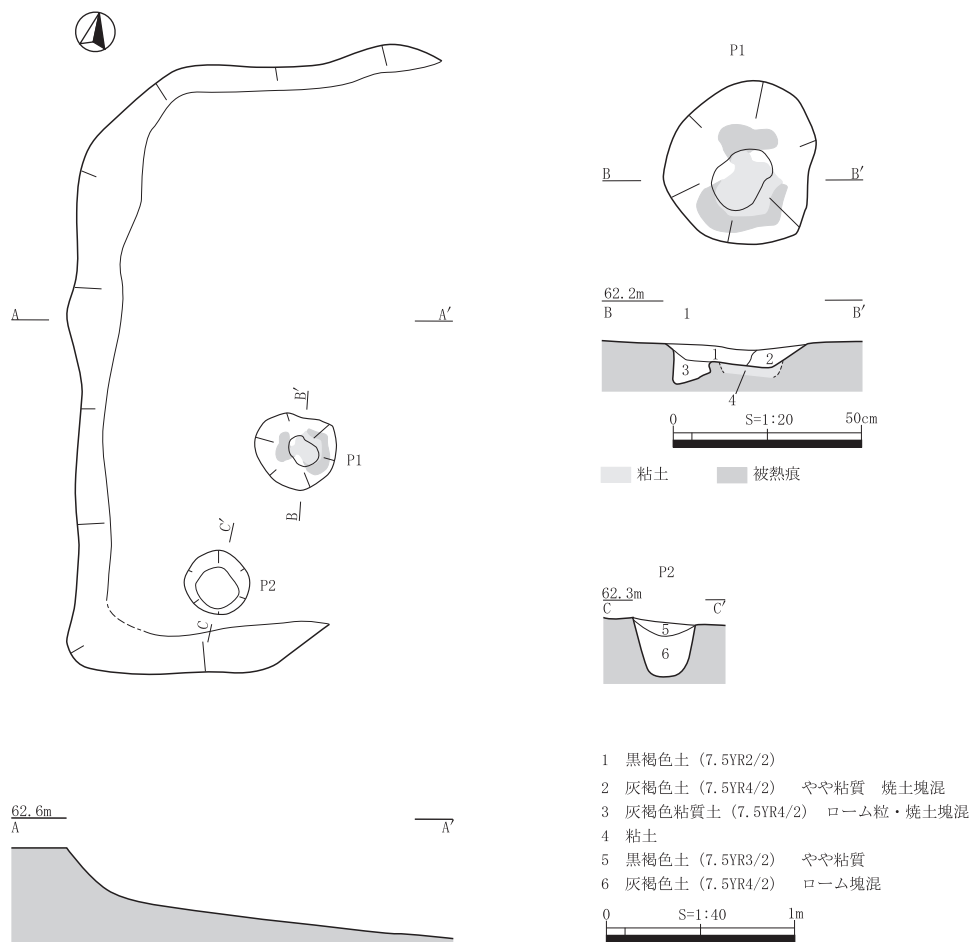
第10図 SS1出土遺物

床面の調査では溝1条、ピット6基が検出された。溝は床面の北側で確認され、平面は段状遺構平面と相似した形状である。また、溝とP3～5は切り合っており、検出状況、土層断面の状況では、ピット埋没後に溝が掘削されたと判断される。

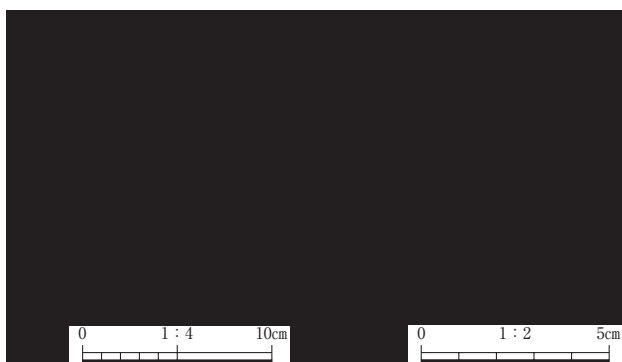


第11図 SS1

出土遺物は、床面直上から1、埋土中から2～4などの弥生土器が認められた。本遺構の時期は床面出土の1がⅢ-3様式に相当することから、弥生時代中期中葉頃の遺構と思われる。



第12図 SS2



第13図 SS2出土遺物

SS2 (第12・13図、PL.2・4)

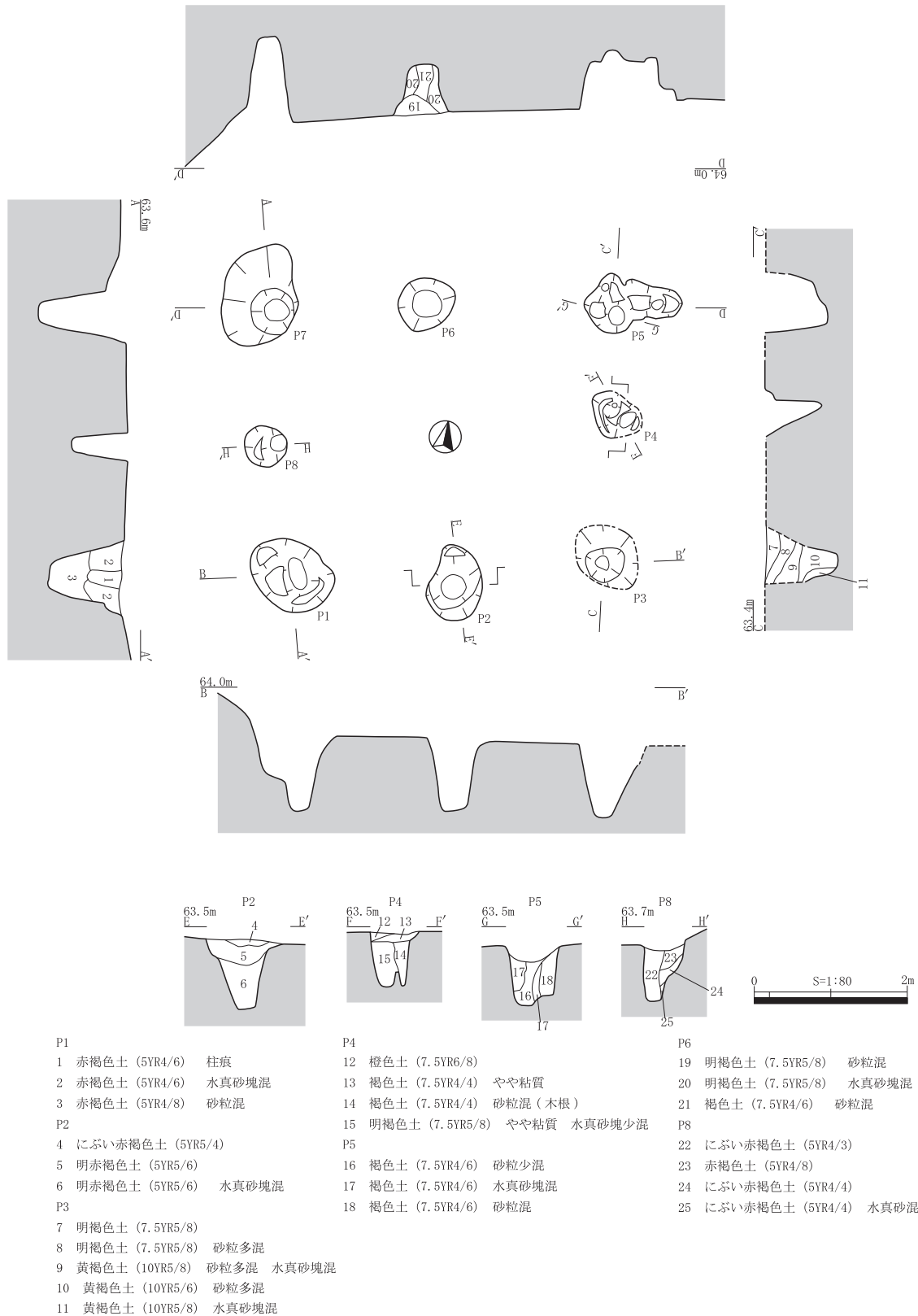
B7グリッドで確認された段状遺構である。確認した規模は長軸3.2m、短軸1.9m、深さ60cmで、西側に位置するSS1の床面を掘削する。

床面の調査では、ピット2基が確認された。このうちP1は鍛冶炉で、平面はやや歪な円形、断面皿状の掘り方で、底面には粘土を貼って炉床が作られており、内壁には被熱面が認められる。また、埋土中からは羽口も出土した。

出土遺物は、上記のとおり、P1から羽口5が出土したほか、埋土中から底部回転糸切りの土師器坏6が出土した。本遺構の時期は、埋土中出土遺物6から10世紀以降と考えられる。

SB1 (第14図・PL.3)

2区平坦面、B6グリッドで確認された桁行2間、梁行2間の掘立柱建物である。主軸は妻側を正面としてN-79°-E、規模は桁行6.0m、梁行4.8mを測る。また、西側梁行の柱穴間は心々で1.76m、



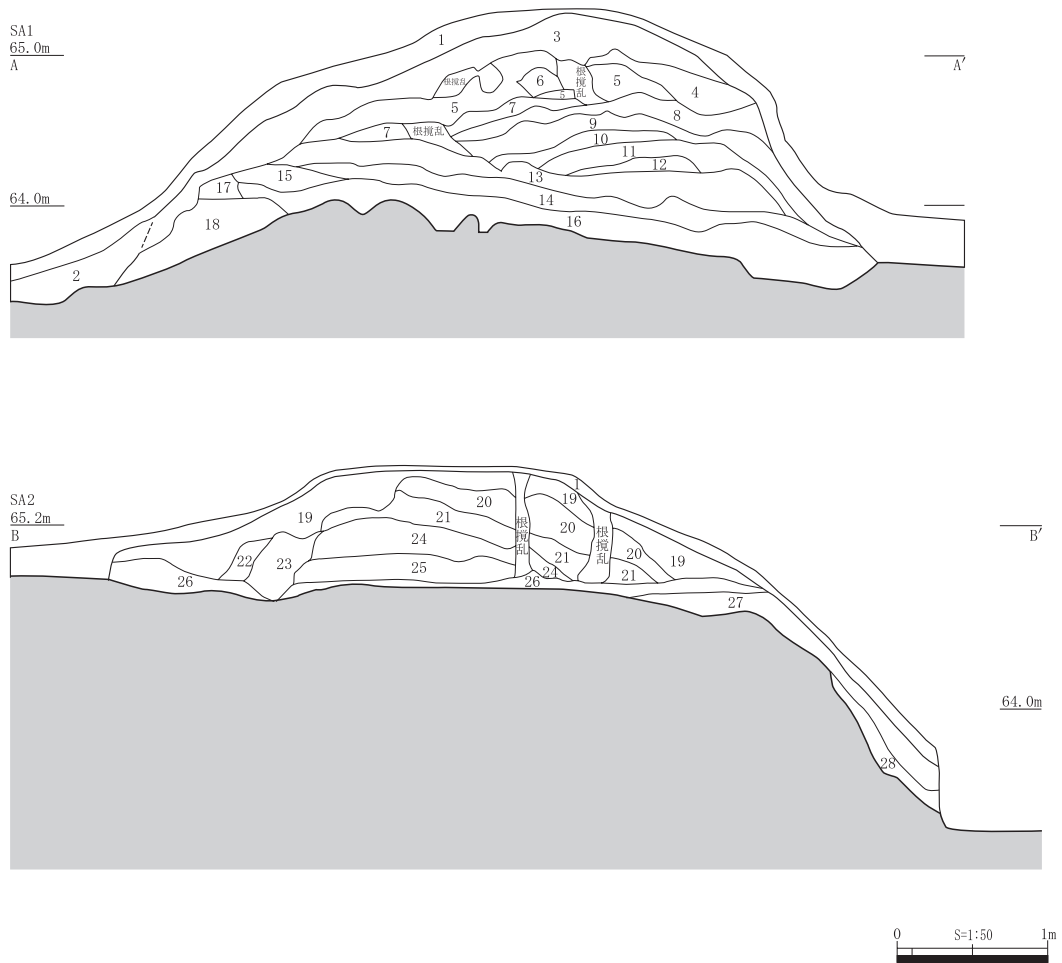
第14図 SB1

南側桁行の柱穴間に心々で2.0mである。

柱穴平面形は不整な円形が多く、検出面での大きさも不揃いであるが、深さは、P6・8など若干浅いものがあるものの、底面の深さを標高62.3~62.4mほどに揃えて掘られた柱穴が多い。

本遺構からは、細片のため図化は行わなかったが、P2から灯明皿に用いられた土師皿が出土した。

本遺構の時期は、P2出土遺物、検出面上層中の出土遺物から16世紀後半頃の遺構と考えられる。



- | | |
|--|---|
| <p>SA1</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 表土 2 橙色土 (5YR6/8) 3 橙色土 (5YR6/8) やや粘質 4 褐灰色土 (5YR4/1) やや粘質 ローム塊混 5 黒褐色土 (5YR3/1) 6 橙色土 (5YR6/8) やや粘質 7 褐灰色土 (5YR4/1) やや粘質 ローム塊混 8 明赤褐色土 (5YR5/8) やや粘質 黒色土混 9 黒褐色土 (5YR3/1) やや粘質 ローム塊混 10 橙色土 (5YR6/8) やや粘質 11 褐灰色土 (5YR4/1) やや粘質 ローム塊混 12 黒褐色粘質土 (5YR3/1) ローム塊少混 やや粘質 13 明赤褐色粘質土 (5YR5/8) やや粘質 水真砂少混 14 褐灰粘質土 (5YR4/1) やや粘質 水真砂塊混 15 黄橙色土 (10YR7/6) 黒色土混 16 灰褐色粘質土 (5YR4/2) 17 褐灰色土 (5YR4/1) やや粘質 ローム塊混 18 明赤褐色土 (5YR5/8) やや粘質 | <p>SA2</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 表土 19 にぶい赤褐色土 (5YR4/4) 20 暗赤褐色土 (5YR3/2) やや粘質 21 明赤褐色土 (5YR5/8) 黒色土混 22 灰褐色土 (5YR4/1) やや粘質 23 黒褐色土 (5YR2/2) やや粘質 24 黒褐色土 (5YR3/1) やや粘質 ローム塊少混 25 灰褐色土 (5YR4/1) ローム塊多混 26 黄橙色土 (10YR7/6) 黒色土・ハードローム少混 27 赤褐色土 (5YR4/6) 黒色土少混 28 黄橙色土 (10YR7/6) 黒色土混 |
|--|---|

第15図 SA1・2

SA1・2 (第5・15図、PL.3)

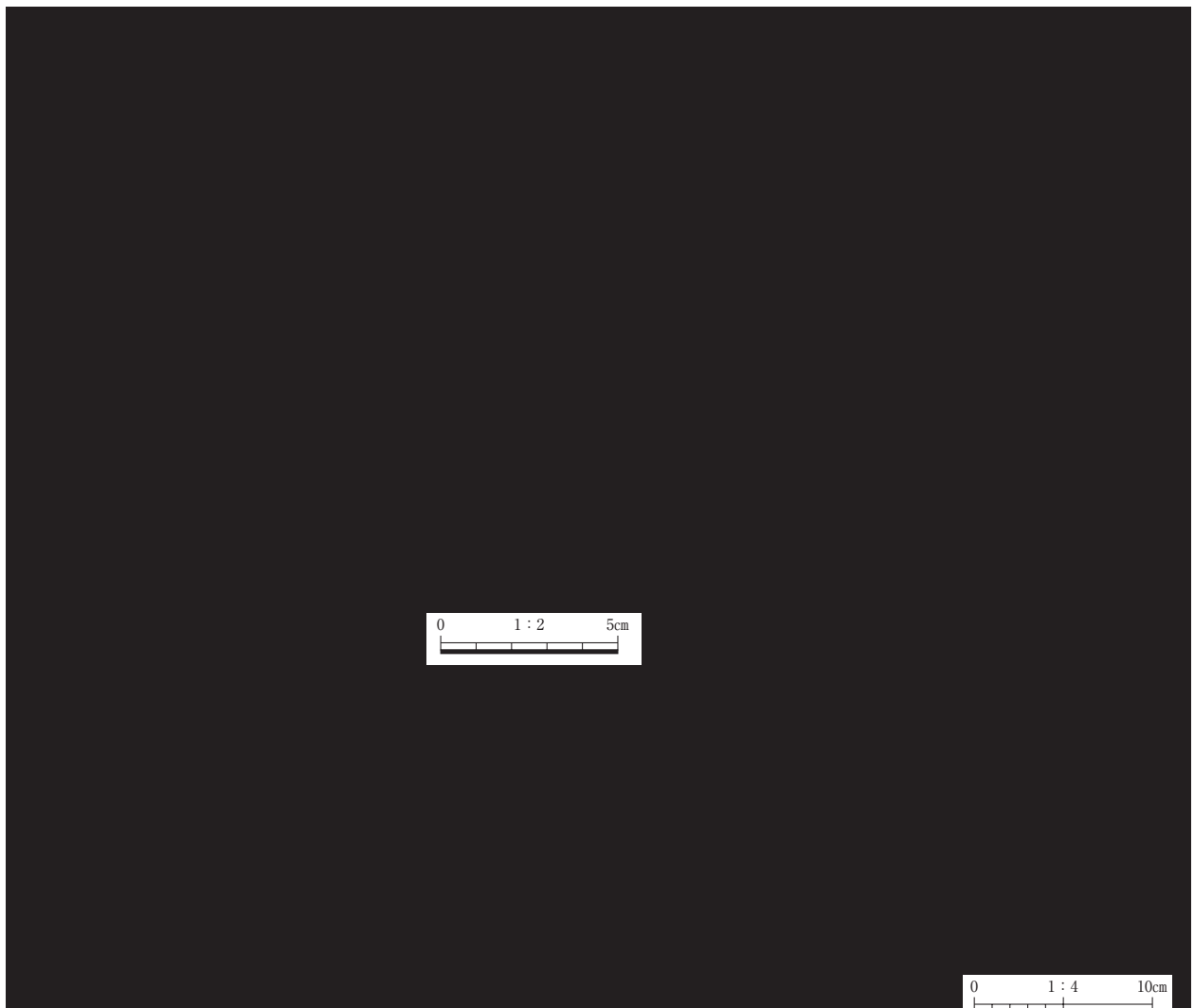
2区平坦面の南北に認められた盛土遺構である。北側のSA1の平面形は東西方向に長い歪な矩形を呈し、規模は東西9.2m、南北5.0m、平坦面からの高さ1.95mを測る。南側のSA2の平面形は、南東部は攪乱により掘削されているものの、ほぼ円形で、規模は東西5.7m、南北5.4m、平坦面からの高さ2.4mを測る。

盛土の状況は、SA1、SA2ともに最上層は広い範囲を覆うように、それよりも下層は版築状に盛土をするが、しまりのない層が多いことから突き固めての盛土ではなかったと思われる。また、SA1は主に橙色土、褐灰色土、明赤褐色土、黒褐色土を薄く、細かな単位で盛土するが、SA2は暗赤褐色土、明赤褐色土、黒褐色土、灰褐色土等を厚く盛土され、盛土の仕方に雑な観を呈する。

本遺構から出土遺物は認められなかったが、本遺構は、平坦面の北辺、南辺に合わせて構築された盛土遺構であり、また盛土に用いられた土も平坦面造成時に排出したと思われる地山土を主にしていることから、平坦面の造成に伴う盛土遺構であったと思われる。時期は平坦面に建てられた掘立柱建物の年代から16世紀後半頃と考えられる。

第4節 包含層出土遺物

1区（第16図、PL.5）では遺構検出面直上に古代の遺物包含層の堆積が認められた。7・8は内外面赤彩された土師器坏で、風化のため調整は不明瞭であるが、8の底部外面などケズリ調整と思われることから8世紀頃のものと思われる。10・11は内外面赤彩された土師器皿、9は竈の底部、16は須恵器長頸壺である。そのほか、1層及び2層からは須恵器の蓋17、土師器甕12・13、土師器高坏14、内外面赤彩の土師器坏25、須恵器壺18、鉄砲玉M2が出土した。2区（第16図、PL.6）では平坦面の遺構検出面直上に堆積する2層から19・20など弥生時代中期の甕が出土したほか、表土中からは21の在地系の土師皿、22～30などの京都系土師皿が出土する。このうち21～26は口縁部に煤が付着することから灯明皿として使用されていたものと思われる。



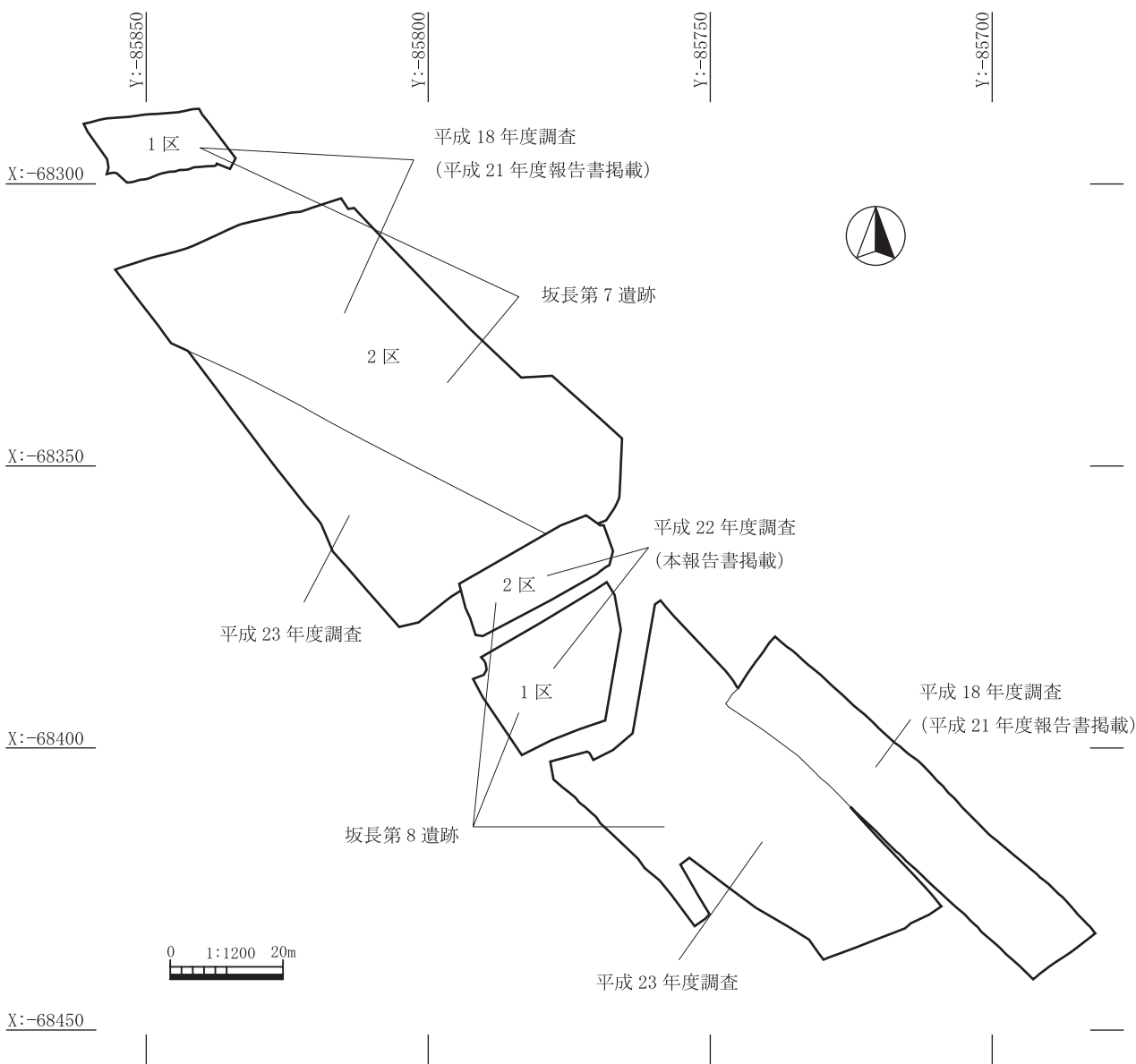
第16図 包含層出土遺物

第4章 坂長第8遺跡の調査

第1節 遺跡の立地と層序

坂長第8遺跡は、越敷山（標高226m）から北西方向へ派生した尾根の北側の谷に位置する。ここは幅100mほどの東から西へのびる細長い谷であり、そのさらに北側には標高55mほどの長者原台地が広がる。

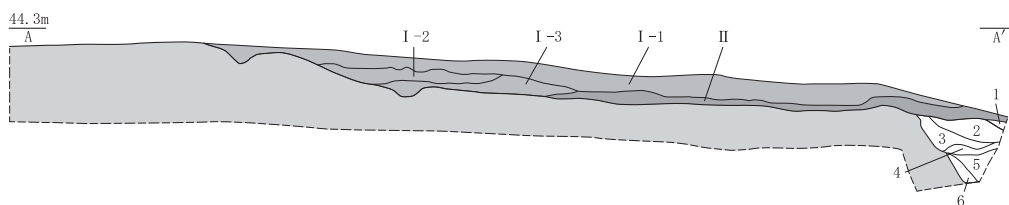
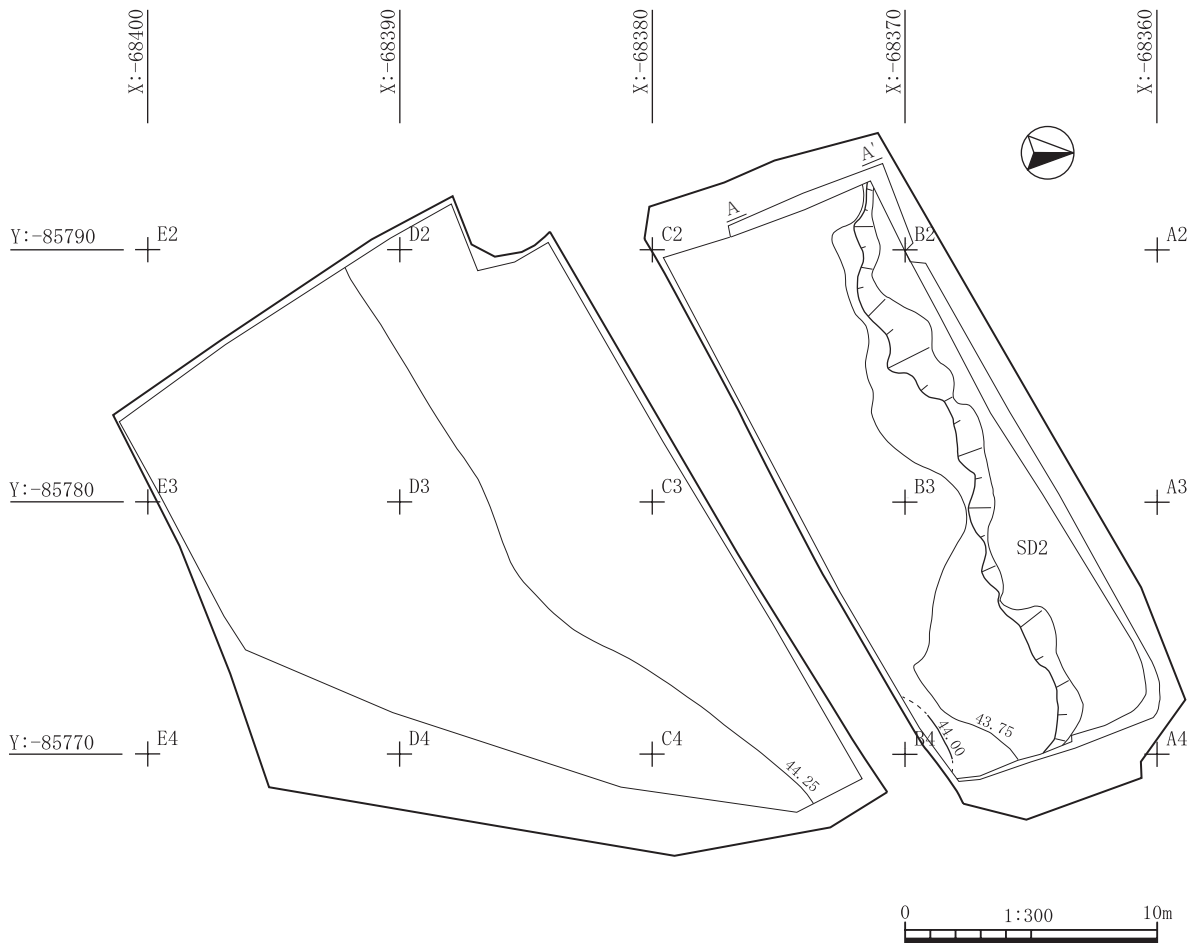
遺跡のすぐ北側の谷には、弥生時代から古代の溝などが確認された坂長第7遺跡があり、その北側の台地上では、相見郡衙の関連施設とみられる律令期の大型掘立柱建物跡や鍛冶工房跡などが確認された坂長第6遺跡がある。また、当遺跡の南側の丘陵尾根上には坂長下門前遺跡が所在するが、縄文時代とみられる落とし穴が希薄に分布するのみである。



第17図 調査区配置図

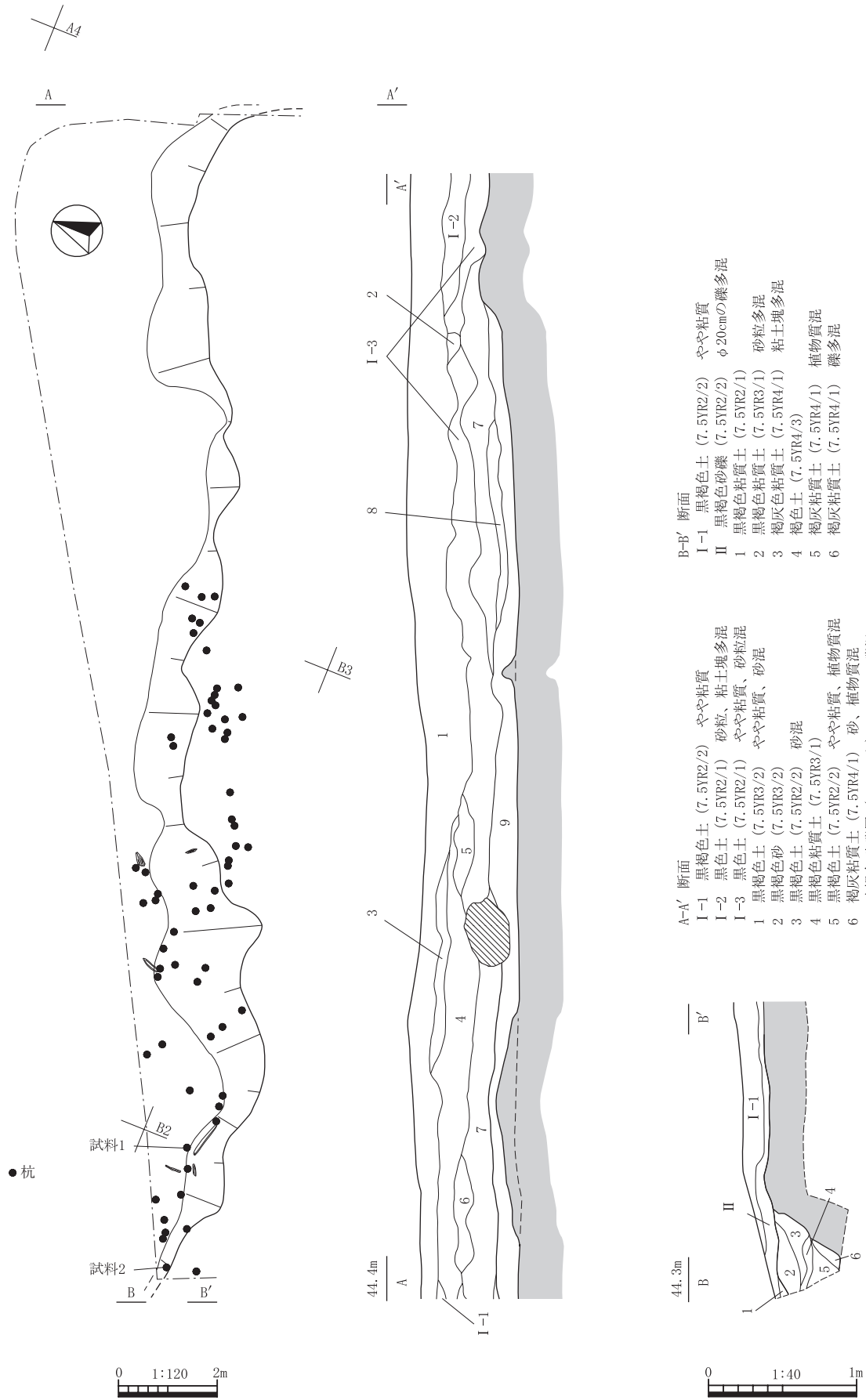
坂長第8遺跡は、平成18年度に調査が行われている。ここでは縄文時代から弥生時代前期、古墳時代中期を主体とした2層の包含層、縄文時代から弥生時代、古墳時代中期の2面の遺構面の調査が行われ、主に古墳時代中期頃の集落であったことが確認されている。今回の調査区は、この調査区の北側であり、平成18年度に行われた坂長第7遺跡の南側に隣接する。

調査区の堆積状況は、1区が後世の造成によって包含層が認められなかったが、2区については厚い客土の下に包含層が薄く堆積していた。調査では、これらを黒褐色から黒色を呈する粘性のある層（I層）、黒褐色の砂礫層で、直径20cmほどの礫を多く含む層（II層）に分類し、I層及びII層掘削



- | | | | |
|-----|----------------------------|---|-------------------------------|
| I-1 | 黒褐色土 (7.5YR2/2) やや粘質 | 1 | 黒褐色粘質土 (7.5YR2/1) |
| I-2 | 黒色土 (7.5YR2/1) 砂粒、粘土塊多混 | 2 | 黒褐色粘質土 (7.5YR3/1) 砂粒多混、SD2埋土 |
| I-3 | 黒色土 (7.5YR2/1) やや粘質、砂粒混 | 3 | 褐灰色粘質土 (7.5YR4/1) 粘土塊多混、SD2埋土 |
| II | 黒褐色砂礫 (7.5YR2/2) φ20cmの礫多混 | 4 | 褐色土 (7.5YR4/3) SD2埋土 |
| | | 5 | 褐粘質土 (7.5YR4/1) 植物質混、SD2埋土 |
| | | 6 | 褐粘質土 (7.5YR4/1) 礫多混、SD2埋土 |

第18図 坂長第8遺跡遺構配置図



第19図 SD2

後の二度にわたり遺構検出を行った。調査の結果、Ⅱ層掘削後の地山上面において弥生時代中期頃と考えられるSD2を確認した。

第2節 調査成果

SD2（第19～21図、PL. 7・8）

2区北側にて、Ⅱ層掘削後の地山上面で検出した。東から西へと延びており、東側が山側、西側は谷側へとやや屈曲する。検出面から底面までの深さは、東側で30cm、西側で82cmであり、西に行くほど深い。西半分には63本と多くの杭が打たれており、このうち幾つかは焼けて炭化していた。これらの杭のうち、2本をサンプルとして持ち帰り、放射性炭素同位体による年代測定を実施したところ、 $1,940 \pm 20\text{BP}$ 、 $1,980 \pm 30\text{BP}$ 、弥生時代中期後半頃との結果が得られた（第5章参照）。

遺物は縄文時代晩期から弥生時代中期前葉にかけての土器、石器、ガラス玉が出土した。1～7は深鉢である。1は波状口縁をなし、口縁部や体部に無刻目、刻目のある貼付突帯文や沈線文、刺突文



第20図 SD2出土遺物①



第21図 SD2出土遺物②

を施す。2～7は突帯文土器であり、このうち2～4には刻目が付き、5～7には付かない。8、9は浅鉢であり、9は器面をヘラミガキによって調整する。10～12は壺であり、10は端部に沈線を施し、外反する口縁部をもつ。11は肩部に綾杉文を施し、12は小型品である。これらはI-2～3様式の特徴を持つ。13～15は甕であり、口縁部を「L」字状に屈曲させる。このうち13は口縁部端部に刻目を施し、頸部に2条の沈線文を施す。14、15は頸部に多条の沈線文が施され、14にはさらに三角形の刺突文が施される。これらはI-3～II-1様式の特徴を示す。

S1、S2は黒曜石製の石鏃、S3はサヌカイト製の石鏃であり、S1、S3は凹基式、S2は平基式である。S4はサヌカイト製の石錐であり、頭部と錐部の境が明瞭で、錐部が細長い。S5はサヌカイト製の楔形石器。S6～8は石鋏であり、S6は玄武岩製で有肩形とみられる。S7は緑色片岩製で短冊形、S8はデイサイト製で撥形を呈す。J1はガラス製の小玉である。

さて、時期についてだが、出土した遺物と¹⁴C年代測定の結果から、弥生時代中期頃まで機能していたと考えられる。

第3節 包含層出土遺物

遺物は調査区北側を中心に出土した。これらは、縄文時代早期、晩期、弥生時代前期～後期、古墳時代前期～後期、古代、中世と時期幅があるが、縄文時代晩期～弥生時代前期、古墳時代後期、古代のものが比較的多い。各層の出土状況を見ると、II層は縄文時代晩期～弥生時代の遺物を中心に古墳時代まで含まれ、I層は古墳時代後期や古代の遺物を中心に中世まで含む。

土器 (16～67)

土器は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、磁器などが出土した。16～21は縄文土器である。16～20は突帯文土器であり、深鉢と考えられる。16～19には刻目があり、20にはない。21は鉢であり、口縁部が外反し、体部との境に稜が認められる。また、内外面に丁寧なヘラミガキを施す。

22～25は弥生土器であり、22は前期の壺。肩部の外面に櫛描沈線文を施す。23は口縁部に格子文を施す壺、24は口縁部が「くの字」状に屈曲する甕であり、ともに中期である。25は後期前葉の甕であり、口縁部に5条の擬凹線文、外面や口縁部内面に赤色顔料を塗布する。

26～35は土師器であり、26は外面に竹管文や刺突文が施される壺、27は山陰型甑形土器。ともに前期前半頃と考えられる。28は後期の甕であり、口縁部を「くの字」状に屈曲させる。29は口縁部に凹線状の浅い窪みが認められる碗であり、中期から後期頃とみられる。30は古代の皿であり、口縁端部が内側に張り出す。31～33は古代末から中世前期頃の碗であり、32、33は高台が付く。34は甑の把手、35は移動式竈である。

須恵器は36～67である。36～53は古墳時代の蓋坏であり、36～45は坏蓋、46～53坏身である。54～56は宝珠や輪状つまみをもつ坏蓋であり、7世紀後半から8世紀頃のもの。57は中央が凹むつまみの付く高坏の蓋、58は有蓋高坏、59、60は無蓋高坏であり、古墳時代後期に属する。61は短頸壺の蓋、62は長頸壺であり、肩部にカキメが施される。ともに古墳時代後期。63は広口壺であり、古代に属する。64、65は甗であり、波状文が施される。66は甕、67は用途不明品であり、注口、把手の一部が認められる。

磁器は図化していないが、白磁、青磁が合計2点出土している。白磁は口縁部が玉縁状になる白磁碗IV類であり、青磁は鎬蓮弁のある龍泉窯系碗B1類である。



第22図 包含層出土遺物①

瓦 (68～71)

瓦は平瓦が出土した。いずれも古代に帰属する。68は縄叩き、69～71は正格子叩きにより凸面の整形が行われ、後者が多い。成形方法は、凹面に模骨痕が認められることから、桶巻き作りによるものと考えられる。



第23図 包含層出土遺物②



第24図 包含層出土遺物③

石器・玉類（S9～26、J2）

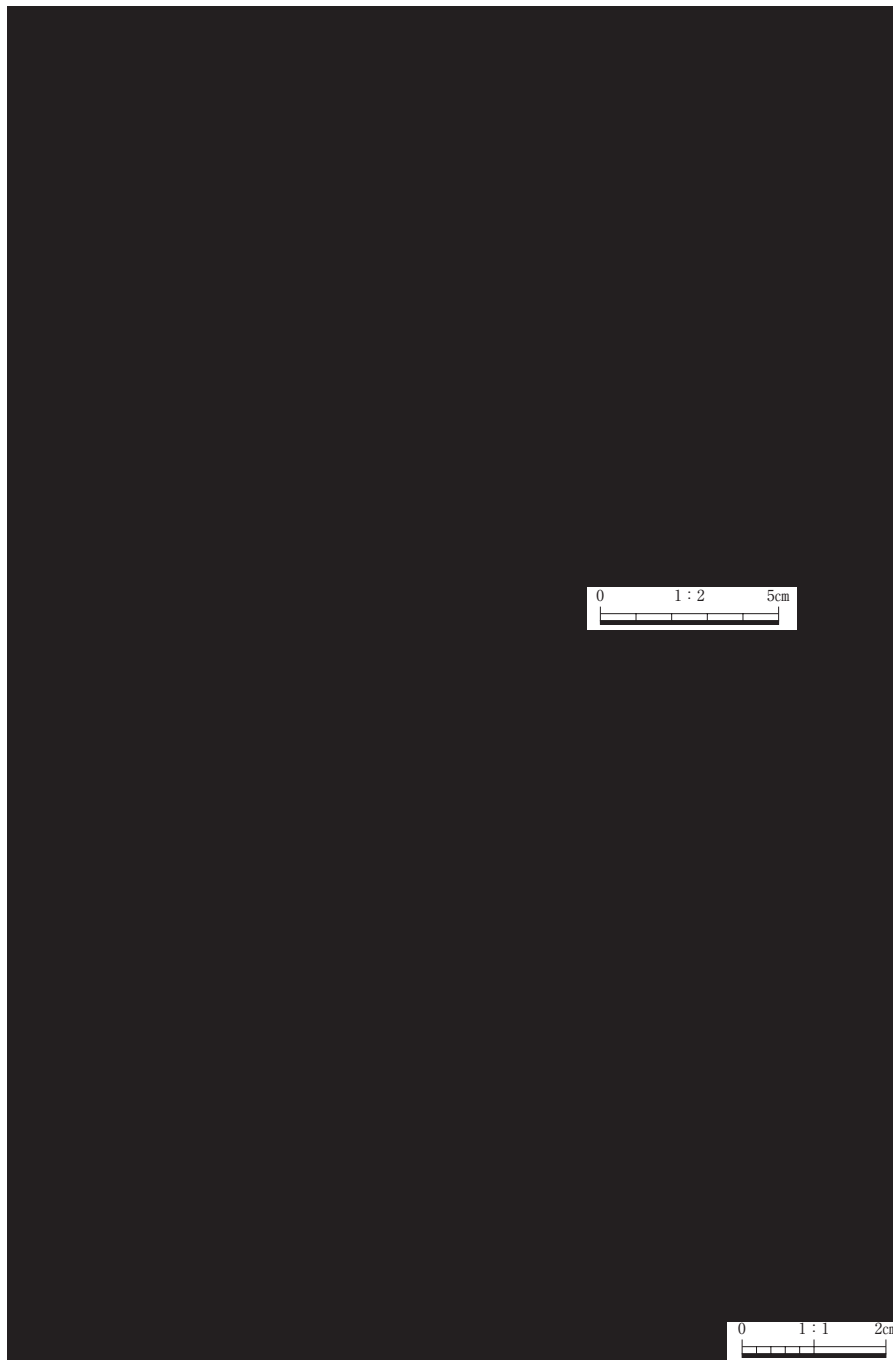
石器は有茎尖頭器、石鏃、削器、楔形石器、石鋏、石錘、敲石、砥石、石庖丁、磨製石斧、玉類は白玉が出土した。S9は有茎尖頭器であり、サヌカイト製。S10、11は凹基式の石鏃、S12、13は平基式の石鏃、S14は凸基Ⅱ式の石鏃であり、S10は黒曜石製、他はサヌカイト製。S15は削器であり、サヌカイト製。S16は黒曜石製、S17はサヌカイト製の楔形石器。S18はデイサイト製の有肩形の石鋏とみられ、S19は緑色片岩製で短冊形の石鋏である。S20は石錘であり、両側が僅かに挟れる。S22は凝灰岩製の砥石、S23は粘板岩製の磨製石庖丁、S24は粘板岩製の磨製石庖丁を再加工したものである。S25、26は閃緑岩製の磨製石斧。J2は滑石製の白玉である。



第25図 包含層出土遺物④



第26図 包含層出土遺物⑤



第27図 包含層出土遺物⑥

木製品 (W 1 ~20)

木製品は、椀、箱、曲物、槽、齋串などが出土した。W 1 ~ 3 は漆塗りの椀であり、このうちW 3 の外面には赤漆による文様が描かれる。W 4 は組み合わせ式の箱の側板と考えられ、左右を「L」字状にカットし、接合部分に木釘を2本ずつ、合計8本打ち込む。W 5 は片面に斜方向の切り込みが入る板状の木製品であり、曲物の側板とみられる。W 6 ~ 9 は曲物や桶の底板であり、W 6、7の片面には線刻状の使用痕が残る。W 10は円形か楕円形を呈する槽とみられ、片面に線刻状の使用痕が認められる。W 11、W 12は棒状の木製品であり、ともにほぞ状の突起がある。W 13はやや厚めの板材の両端をカットしており、栓の可能性ある。W 14は片側に円形の穿孔がある板状の木製品、W 15は齋串である。W 16~20は棒状の木製品であり、片方を削り有頭状に加工する。



第28図 包含層出土遺物⑦

第5章 坂長第8遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

坂長第8遺跡は、米子平野南東部の日野川左岸に広がる長者原台地と越敷山から派生した丘陵に挟まれた谷に位置する。長者原台地は、大山火山北西部に発達する段丘化した火山麓扇状地の一つであり、荒川(1984)により古期扇状地I面に分類されている。扇状地を構成する礫層は、風化したデイサイト質の円礫～亜円礫とされ、古期大山火山体が堆積物の供給源として考えられている。また、扇状地上のテフラ層序から、その形成年代は15万年前以前とされている。

本報告では、坂長第8遺跡から出土した木製品を対象とした放射性炭素年代測定を行い、それらが出土した遺構の年代資料を作成する。木製品の一部については、樹種の同定を行い、当該期の木材利用についても検討を行う。

1. 試料

今回の分析の対象とされた遺物は、坂長第8遺跡出土品が3点である。これらのうち、杭2点については放射性炭素年代測定を行い、容器破片1点については樹種同定を行う。

各試料の種類、出土遺構、出土層位および分析内容を一覧にして表1に示す。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)か

表1 遺物試料一覧

遺跡名	種類	遺物番号	遺構・地区	層位	分析内容
坂長第8	生杭	試料1	SD2		放射性炭素年代測定
坂長第8	焼杭	試料2	SD2		放射性炭素年代測定
坂長第8	容器破片	W10	B3	I層	樹種同定

ら提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正することである。暦年較正は、CALIB REV6.0.0のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

(2) 樹種同定

剃刀を用いて木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)、伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

各試料の同位体効果による補正を行った測定結果を表2に示す。また、暦年較正の結果を表3に示す。以下に坂長第8遺跡の試料について述べる。

分析試料はともにSD2から出土した生杭と焼杭であるが、前者は $1,940 \pm 20$ BP、後者は $1,980 \pm 30$ BPを示す。この結果からは、両者はほぼ同時期のものとされる。暦年代では、 σ で見ると前者は1

表2 放射性炭素年代測定結果

遺跡名	種類	遺物番号	遺構	層位	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
坂長第8	生杭	試料1	SD2		$1,940 \pm 20$	-23.91 ± 0.57	$1,920 \pm 20$	IAAA-102285
坂長第8	焼杭	試料2	SD2		$1,980 \pm 30$	-29.43 ± 0.89	$2,050 \pm 20$	IAAA-102286

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

世紀～2世紀、後者は紀元前1世紀末から1世紀中頃と年代幅に若干の差が生じるが、おそらく1世紀頃とされるものであろう。

表3 暦年較正結果

遺跡名	種類	遺物番号 or遺構	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)												Code No.			
				誤差	cal AD/BC						cal BP				相対比				
					cal	AD	26	-	cal	AD	42	cal	BP	1,924			-	1,908	0.218
坂長第8	生杭	試料1	1,937±24	σ	cal	AD	47	-	cal	AD	85	cal	BP	1,903	-	1,865	0.740	IAAA-102285	
					cal	AD	110	-	cal	AD	113	cal	BP	1,840	-	1,837	0.042		
					cal	AD	9	-	cal	AD	11	cal	BP	1,941	-	1,939	0.005		
				2σ	cal	AD	17	-	cal	AD	126	cal	BP	1,933	-	1,824	0.995		
					cal	BC	18	-	cal	BC	14	cal	BP	1,968	-	1,964	0.034		IAAA-102286
					cal	AD	0	-	cal	AD	59	cal	BP	1,950	-	1,891	0.966		
2σ	cal	BC	40	-	cal	AD	71	cal	BP	1,990	-	1,879	1.000						

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
- 5) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を表4に示す。木製品は、針葉樹1分類群(スギ)に同定された

- ・スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

坂長第8遺跡から出土した容器破片は、出土層位から古墳時代～平安時代の資料と考えられ、形状から槽などと考えられる。容器破片はスギに同定され、割裂性の高いスギを利用したことが推定される。槽については、桂見遺跡の古墳前期や古代の資料がスギ、岩吉遺跡の古墳時代中期の資料がスギとヒノキ属に同定されており、今回の結果とも調和的である(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1991; 古川ほか, 1996)。

表4 樹種同定結果

遺跡名	種類	遺物番号	地区	層位	樹種
坂長第8	容器破片	W10	B3	I層	スギ

引用文献

荒川 宏, 1984, 大山火山北西部における火山麓扇状地の形成. 地理学評論, 57, 831-855.

古川郁夫・堤 誠司・佐藤真美, 1996, 桂見遺跡より出土した木器類の樹種構成の特徴. 「鳥取県鳥取市 桂見遺跡 主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路整備事業に伴う発掘調査報告書」, 鳥取県教育文化財団調査報告書45, 鳥取県教育文化財団, 357-363.

林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.

伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.

伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

パリノ・サーヴェイ株式会社, 1991, 岩吉遺跡出土木製品材同定. 「岩吉遺跡Ⅲ 中小河川改修事業大井手川改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査」, 鳥取市文化財報告書30, 鳥取市教育委員会, 337-348.

Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.(編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第6章 総括

前章までに述べた通り、坂長武寿羅遺跡では、落とし穴2基、段状遺構2基、掘立柱建物1棟、盛土遺構2基を、そして坂長第8遺跡では、自然流路1条を確認した。本章はこれら両遺跡の総括をすべきところであるが、坂長第8遺跡については、今回（平成22年度）の調査区の隣接地を平成23年度に調査を行っているため、平成23年度調査報告で合わせ総括することとしたい。また、坂長武寿羅遺跡についても、東側に隣接する坂長ブジラ遺跡、坂長尻田平遺跡を平成22年度に調査（未報告）していることから、本章では、坂長武寿羅遺跡で確認された遺構について、周辺遺跡の状況を踏まえて概観し、本報告の総括としたい。

縄文時代 出土遺物が認められず時期不明であるが、落とし穴2基が縄文時代に該当する可能性が高い。本遺跡周辺では、坂長下門前遺跡（高橋 2007、2010）、坂長ヨコロ遺跡（高橋 2010）、坂長熊谷遺跡（高橋 2010）、坂長前田遺跡（野口 2011）など落とし穴が確認される遺跡が多く存在しており、これらの遺跡では、土器等の遺物の出土が認められる落とし穴はいずれも縄文時代後晩期のものである。よって、本遺跡で確認された落とし穴2基についても周辺遺跡同様、当該期以前の可能性が高く、本遺跡周辺は、縄文時代に狩猟場として盛んに利用されていたと思われる。

弥生時代 弥生時代中期後葉の段状遺構1基が確認される。本遺跡周辺では、当該期の遺構の確認は少なく、長者屋敷遺跡で廃棄土坑1基が確認される。しかし、周辺の坂長第7遺跡（加藤ほか 2009）、坂長前田遺跡、隣接する坂長ブジラ遺跡、坂長尻田平遺跡等では、自然流路の埋土中や包含層中から中期後葉の土器が多く出土しており、付近における集落の存在が予想される。

古代 床面に鍛冶炉を備えた段状遺構1基が確認される。出土遺物から10世紀以降と考えられる。付近には古代の鍛冶工房遺跡である坂長第6遺跡（坂本 2009）が存するが、8世紀代を中心とすることから本遺構との時間的な隔たりは大きい。当該期に属する遺構、遺物が確認される遺跡は、坂長下屋敷遺跡（森本 2006）、坂長第7遺跡、坂長前田遺跡であるが、溝などがわずかに認められる程度であり、本遺跡との関連は詳らかにできない。

中世 掘立柱建物1棟、盛土遺構2基がある。本遺跡北側に隣接する普門寺は、伯耆町大寺にあった安国寺の奥の院であったとされ、16世紀に安国寺二世器工晟仁により開山されたと伝えられる（岸本町 1983）。本遺跡で確認された遺構も出土遺物から16世紀後半頃の年代が考えられることから、この普門寺との関連が窺える。また、本遺跡の西側に位置する坂長下門前遺跡でも、長さ70m、幅2.7m、高さ1.0～1.5mほどの当該期の土塁が確認されており、寺域を画すための性格など、本遺跡同様、普門寺との関連性が指摘されている（高橋 2010）。

以上、坂長武寿羅遺跡で確認された遺構について概観したが、前記したとおり、坂長武寿羅遺跡、坂長第8遺跡とも隣接地を調査していることから、その報告の際、改めて両遺跡について総括したい。

参考文献

- 岸本町 1983『岸本町誌』
 坂本嘉和 2009『坂長第6遺跡』（財）鳥取県教育文化財団
 高橋章司 2007『坂長下門前遺跡』（財）鳥取県教育文化財団
 2010『坂長下門前遺跡2 坂長ヨコロ遺跡 坂長熊谷遺跡』（財）鳥取県教育文化財団
 野口良也 2011『坂長前田遺跡』（財）鳥取県教育文化財団
 森本倫弘 2006『長者屋敷遺跡 坂長下屋敷遺跡』（財）鳥取県教育文化財団

表5 坂長武寿羅遺跡土器観察表

遺物 No	挿入 PL	遺構 層位	器種	口径 (cm) 器高 (cm)	部位	調整・文様	胎土	色調		焼成	備 考
								外	内		
1	第10区 PL.4	2区SS1 床直	弥生土器 甕	※17.0 21.2	口縁部～ 底部	外面 口縁部・頸部ナデ、体部ハケ・ナデ 内面 ナデ・オサエ	密	外面 内面	にぶい橙色 にぶい黄橙色	良好	外面煤付着
2	第10区 PL.4	2区SS1 埋土	弥生土器 甕	※22.6 △6.6	口縁部～ 体部	外面 口縁部1条の凹線、頸部ナデ、体部ハケ 内面 口縁部・頸部ナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	やや粗	内外面	にぶい黄橙色	良好	
3	第10区 PL.4	2区SS1 埋土	弥生土器 甕	— △16.3	体部	外面 ハケ・ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	内外面煤付着
4	第10区 PL.4	2区SS1 埋土	弥生土器 壺	— △3.2	底部	外面 ナデ 内面 ナデ	やや粗	外面 内面	にぶい赤褐色 黒褐色	良好	
6	第13区 PL.4	2区SS2 埋土	土師器 坏	— △1.4	底部	外面 ナデ、底部回転条切り 内面 ナデ・オサエ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
7	第16区 PL.5	1区B4 4層	土師器 坏	※13.0 △2.6	口縁部～ 体部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面	にぶい橙色	良好	内外面赤彩
8	第16区 PL.5	1区B4 4層	土師器 坏	— △1.6	底部	外面 ナデ、底部ヘラケズリ 内面 ナデ	密	内外面	にぶい橙色	良好	内外面赤彩
9	第16区 PL.5	1区A4 4層	土師器 甕	— △7.0	底部	外面 ナデ・ハケ 内面 ヘラケズリ	やや粗	内外面	にぶい橙色	良好	
10	第16区 PL.5	1区B4 4層	土師器 皿	※18.0 1.1	口縁部～ 底部	外面 ナデ、底部ヘラケズリ後ナデ 内面 ナデ	密	内外面	橙色	良好	内外面赤彩
11	第16区 PL.5	1区B4 2・4層	土師器 皿	※18.0 △2.0	口縁部～ 体部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面	にぶい橙色	良好	内外面赤彩
12	第16区 PL.5	1区B4 2層	土師器 甕	※23.0 △3.5	口縁部～ 頸部	外面 ナデ 内面 口縁部ナデ、頸部ヘラケズリ	やや粗	内外面	橙色	良好	
13	第16区 PL.5	1区B4 2層	土師器 甕	※26.2 △4.6	口縁部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面	橙色	良好	
14	第16区 PL.5	1区A4 2層	土師器 高坏	※15.0 △3.0	口縁部～ 体部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	外面 内面	褐灰色 灰黄褐色	良好	
15	第16区 PL.5	1区A5 2層	土師器 坏	— △2.1	体部～底部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	内外面赤彩
16	第16区 PL.5	1区A・B4 2・4層	須恵器 長頸壺	— △11.1	頸部～体部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面	灰白色	良好	
17	第16区 PL.5	1区C5 2層	須恵器 蓋	16.1 △2.3	天井部～ 口縁部	外面 ナデ、天井部回転ヘラケズリ後ナデ 内面 ナデ	密	内外面	灰黄色	良好	
18	第16区 PL.5	1区A・B4 1層	須恵器 壺	— △13.0	体部～底部	外面 体部ヘラケズリ後ナデ、底部ヘラケズリ後ナデ 内面 ナデ	密	外面 内面	黄灰色 にぶい黄橙色	良好	
19	第16区 PL.6	2区B6 2層	弥生土器 甕	※16.0 △1.8	口縁部～ 頸部	外面 ナデ、口縁部2条の凹線 内面 ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
20	第16区 PL.6	2区B6 2層	弥生土器 甕	— △3.4	体部～底部	外面 ヘラミガキ・ナデ 内面 ヘラケズリ後ナデ	やや粗	外面 内面	にぶい橙色 褐灰色	良好	外面煤付着
21	第16区 PL.6	2区A6 1層	土師器 皿	7.4 1.6	口縁部～ 底部	外面 ナデ、底部回転条切り 内面 ナデ	密	内外面	にぶい橙色	良好	口縁部煤付着
22	第16区 PL.6	2区B6 1層	土師器 皿	8.7 1.7	口縁部～ 底部	外面 ナデ・オサエ 内面 ナデ・オサエ	密	内外面	にぶい橙色	良好	口縁部煤付着
23	第16区 PL.6	2区B6 1層	土師器 皿	8.5 2.0	口縁部～ 底部	外面 ナデ・オサエ 内面 ナデ・オサエ	密	内外面	にぶい橙色	良好	口縁部煤付着
24	第16区 PL.6	2区B6 1層	土師器 皿	※8.0 △1.5	口縁部～ 底部	外面 ナデ・オサエ 内面 ナデ・オサエ	密	内外面	にぶい橙色	良好	口縁部煤付着
25	第16区 PL.6	2区B6 1層	土師器 皿	※8.8 △1.8	口縁部～ 底部	外面 ナデ・オサエ 内面 ナデ・オサエ	密	内外面	にぶい橙色	良好	口縁部煤付着
26	第16区 PL.6	2区B5 1層	土師器 皿	※9.0 △1.7	口縁部～ 底部	外面 ナデ・オサエ、体部1条の沈線 内面 ナデ・オサエ	密	内外面	にぶい橙色	良好	
27	第16区 PL.6	2区B5 1層	土師器 皿	※9.5 △1.9	口縁部～ 体部	外面 ナデ・オサエ 内面 ナデ・オサエ	密	内外面	にぶい橙色	良好	
28	第16区 PL.6	2区A6 1層	土師器 皿	※8.0 △1.7	口縁部～ 底部	外面 ナデ・オサエ 内面 ナデ・オサエ	密	内外面	にぶい橙色	良好	
29	第16区 PL.6	2区B6 1層	土師器 皿	※10.0 △1.8	口縁部～ 体部	外面 ナデ・オサエ 内面 ナデ・オサエ	密	内外面	にぶい橙色	良好	
30	第16区 PL.6	2区B5 1層	土師器 皿	※10.0 △1.7	口縁部～ 体部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面	にぶい橙色	良好	

表6 坂長武寿羅遺跡土製品・金属製品観察表

遺物 No	挿入・PL	遺構・層位	種類	法 量				備 考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
5	第13区 PL.4	2区SS2 PL埋土	羽口	7.3	5.8	2.0	—	にぶい黄橙色
M1	第13区 PL.4	2区SS2 埋土	鍛冶滓	3.9	2.9	1.9	188	
M2	第16区 PL.5	1区B4 2層	鉄砲玉	1.3	1.3	0.8	7.7	

表7 坂長第8遺跡土器観察表

遺物 No	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	焼成	備 考	
1	第20図 PL.7	SD 2 上・下層	縄文土器 深鉢	- △6.8	口縁部	外面：無刻・刻目突帯、沈線、円形の刺突 内面：ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
2	第20図 PL.7	SD 2 埋土	縄文土器 深鉢	- △3.0	口縁部	外面：ナデ、刻目突帯1条 内面：ナデ	密	内外面	灰黄褐色	良好	外面煤付着
3	第20図 PL.7	SD 2 埋土	縄文土器 深鉢	- △3.4	口縁部	外面：ナデ、刻目突帯1条 内面：ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
4	第20図 PL.7	SD 2 埋土	縄文土器 深鉢	- △10.2	口縁部～ 体部	外面：ヘラミガキ、刻目突帯1条 内面：ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	外面煤付着
5	第20図 PL.7	SD 2 埋土	縄文土器 深鉢	28.3 △17.2	口縁部～ 体部下半	外面：ナデ、無刻突帯1条 内面：貝殻条痕	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	内外面煤付着、黒斑有
6	第20図 PL.7	SD 2 上層	縄文土器 深鉢	- △3.4	口縁部	外面：ナデ、無刻突帯1条 内面：ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
7	第20図 PL.7	SD 2 上層	縄文土器 深鉢	- △4.6	口縁部	外面：ナデ、無刻突帯1条 内面：ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
8	第20図 PL.7	SD 2 埋土	縄文土器 浅鉢	- △5.4	口縁部	外面：貝殻条痕 内面：貝殻条痕	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	外面煤付着
9	第20図 PL.7	SD 2 埋土	縄文土器 浅鉢	22.1 10.5	口縁部～ 底部	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	内外面煤付着
10	第20図 PL.8	SD 2 上層	弥生土器 壺	- △4.6	口縁部	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密	内外面	褐灰色	良好	
11	第20図 PL.8	SD 2 上層	弥生土器 壺	- △3.7	体部	外面：ナデ、沈線、綾杉文 内面：ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
12	第20図 PL.8	SD 2 上・下層	弥生土器 壺	- △11.9	胴部～ 底部	外面：ナデ 内面：ナデ	密	外面 内面	にぶい黄橙色 灰色	良好	
13	第20図 PL.8	SD 2 下層	弥生土器 甕	- △5.2	口縁部	外面：沈線2条、口縁端部に刻み 内面：ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
14	第20図 PL.8	SD 2 上層	弥生土器 甕	※18.9 △7.7	口縁部～ 体部上半	外面：口縁部ナデ、沈線6条、刺突文、体部ヘラミガキ 内面：口縁部ハケ、体部ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
15	第20図 PL.8	SD 2 下層	弥生土器 甕	※12.6 △6.1	口縁部～ 体部上半	外面：ナデ、沈線10条 内面：ナデ	密	内外面	灰黄褐色	良好	
16	第22図 PL.8	C3 I層	縄文土器 深鉢	- △10.3	口縁部～ 体部上半	外面：ナデ、刻目突帯1条 内面：ナデ	密	内外面	灰黄褐色	良好	外面煤付着
17	第22図 PL.8	A3 I層	縄文土器 深鉢	- △3.8	口縁部	外面：ナデ、刻目突帯1条 内面：ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
18	第22図 PL.8	A4 II層	縄文土器 深鉢	- △3.0	口縁部	外面：ナデ、刻目突帯1条 内面：ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
19	第22図 PL.8	A3 II層	縄文土器 深鉢	- △4.1	口縁部	外面：ナデ、刻目突帯1条 内面：ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
20	第22図 PL.8	B3 II層	縄文土器 深鉢	- △3.0	口縁部	外面：ナデ、無刻突帯1条 内面：ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
21	第22図 PL.8	C3 I層	縄文土器 鉢	- △5.3	口縁部	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密	内外面	褐灰色	良好	内外面煤付着
22	第22図	B2 II層	弥生土器 壺	- △2.8	体部	外面：ナデ、ヘラ描文 内面：ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
23	第22図	A3 II層	弥生土器 壺	※17.5 △4.5	口縁部	外面：ナデ、口縁端部格子文 内面：ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
24	第22図	A4 II層	弥生土器 甕	※19.5 △5.9	口縁部～ 体部	外面：ナデ、頸部以下ハケ 内面：ナデ、頸部以下ハケ後ヘラミガキ	密	内外面	灰黄褐色	良好	
25	第22図	A3 II層	弥生土器 甕	※15.4 △3.5	口縁部～ 頸部	外面：ナデ、擬凹線5条 内面：ナデ、頸部以下ヘラケズリ	密	内外面	赤色	良好	内面口縁部～外面赤彩
26	第22図 PL.8	B2・3 I・II層	土師器 壺	- △9.2	口縁部～ 頸部	外面：ナデ、竹管文、刻目文、貝殻腹縁の刺突文 内面：ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
27	第22図	A4 II層	土師器 甕形土器	※15.3 △6.3	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ、口縁部以下ヘラケズリ	密	外面 内面	浅黄橙色 にぶい黄橙色	良好	
28	第22図	B3 II層	土師器 甕	※17.2 △4.5	口縁部～ 頸部	外面：ナデ 内面：ナデ 頸部以下ヘラケズリ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
29	第22図 PL.8	A4・B4 I層	土師器 碗	※11.9 △3.4	口縁部～ 底部	外面：ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、下半部ナデ、暗文	密	内外面	明赤褐色	良好	内外面赤彩
30	第22図 PL.9	A3・4・B3 I層	土師器 皿	※24.7 3.8	口縁部～ 底部	外面：口縁部ナデ、下半部ヘラケズリ 内面：口縁部ナデ 底部不整方向ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
31	第22図 PL.8	B3・C2 I層	土師器 高台付坏	※11.1 4.6	口縁部～ 高台部	外面：回転ナデ、底部回転糸切り、高台部ナデ 内面：回転ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
32	第22図 PL.9	A4 I層	土師器 坏	14.0 5.2	口縁部～ 底部	外面：回転ナデ、下半部ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
33	第22図 PL.8	B4 I層	土師器 高台付坏	- △3.2	口縁部～ 高台部	外面：回転ナデ、底部回転糸切り、高台部ナデ 内面：回転ナデ	密	内外面	にぶい黄橙色	良好	
34	第22図 PL.8	A4 I層	土師器 甕	-	把手	外面：ナデ	密	外面	にぶい黄橙色	良好	
35	第22図 PL.9	B3 I層	土師器 移動式竈	- 21.6	体部～ 基部	外面：ハケ 内面：ヘラケズリ	密	外面	にぶい黄橙色	良好	
36	第23図 PL.9	A3・B2・3 I・II層	須恵器 坏蓋	※13.7 3.7	口縁部～ 天井部	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、沈線2条 内面：回転ナデ、天井部不整方向ナデ	密	内外面	灰色	良好	
37	第23図	B3 II層	須恵器 杯蓋	※13.5 △4.0	口縁部～ 天井部	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	内外面	灰色	良好	内面に漆付着

遺物観察表

遺物 No	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	焼成	備	考
38	第23図	A3・B3 I・II層	須恵器 坏蓋	※13.1 △3.4	口縁部～ 天井部	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、沈線2条 内面：回転ナデ	密	内外面 灰色	良好		
39	第23図 PL.9	A3・B3 I・II層	須恵器 坏蓋	12.8 4.1	口縁部～ 天井部	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、一部未調整 内面：回転ナデ、天井部不整方向ナデ	密	内外面 灰色	良好		
40	第23図 PL.9	A3・B3 I・II層	須恵器 坏蓋	※3.0 4.8	口縁部～ 天井部	外面：回転ナデ、天井部ヘラ切り後一部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、天井部不整方向ナデ	密	内外面 灰白色	良好	内面赤彩	
41	第23図 PL.9	B2・3 I・II層	須恵器 坏蓋	13.9 5.0	口縁部～ 天井部	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、沈線1条 内面：回転ナデ、天井部不整方向ナデ	密	内外面 灰色	良好		
42	第23図 PL.9	A3・4B3・3 I・II層	須恵器 坏蓋	13.4 4.5	口縁部～ 天井部	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後一部ナデ 内面：回転ナデ、天井部不整方向ナデ	密	内外面 灰色	良好		
43	第23図 PL.9	A3・4 I・II層	須恵器 坏蓋	13.6 4.3	口縁部～ 天井部	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ、天井部不整方向ナデ	密	内外面 灰色	良好		
44	第23図	B3 I層	須恵器 坏蓋	※13.9 3.0	口縁部～ 天井部	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、天井部不整方向ナデ	密	内外面 灰色	良好		
45	第23図 PL.9	B3 I層	須恵器 坏蓋	12.4 4.3	口縁部～ 天井部	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後ナデ 内面：回転ナデ、天井部不整方向ナデ	密	内外面 灰色	良好		
46	第23図 PL.9	A3・B3 —	須恵器 坏身	※12.1 4.1	口縁部～ 底部	外面：回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	内外面 灰色	良好		
47	第23図 PL.9	B3 I層	須恵器 坏身	※11.5 3.9	口縁部～ 底部	外面：回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ、底部不整方向ナデ	密	内外面 灰色	良好		
48	第23図 PL.9	A3・B3 I・II層	須恵器 坏身	12.3 3.8	口縁部～ 底部	外面：回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、底部不整方向ナデ	密	外面 灰色 内面 灰白色	良好		
49	第23図 PL.9	B3 I層	須恵器 坏身	13.6 3.9	口縁部～ 底部	外面：回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ、底部不整方向ナデ	密	内外面 灰色	良好	焼け歪みがみられる	
50	第23図 PL.9	A3・B3 I・II層	須恵器 坏身	※11.9 4.0	口縁部～ 底部	外面：回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、底部不整方向ナデ	密	内外面 灰色	良好		
51	第23図	B3 I層	須恵器 坏身	— △2.9	受部～ 底部	外面：回転ナデ、底部ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	底部に筋状の痕跡有 内面に漆附着	
52	第23図	A4・B3 I・II層	須恵器 坏身	— △3.2	受部～ 底部	外面：回転ナデ、底部ヘラ切り未調整 内面：回転ナデ、底部不整方向ナデ	密	内外面 灰色	良好	内面赤彩	
53	第23図 PL.9	B4 I層	須恵器 坏身	7.8 3.4	口縁部～ 底部	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、底部不整方向ナデ	密	内外面 灰色	良好		
54	第23図	B3 I層	須恵器 坏蓋	— △3.6	天井部	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、天井部不整方向ナデ	密	内外面 灰色	良好		
55	第23図 PL.9	A4・B4 I層	須恵器 坏蓋	18.5 4.5	口縁部～ 天井部	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後ナデ 内面：回転ナデ、天井部不整方向ナデ	密	内外面 灰色	良好	ヘラ記号×	
56	第23図 PL.9	A4・B3 I層	須恵器 坏蓋	14.8 2.8	口縁部～ 天井部	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後ナデ 内面：回転ナデ、天井部不整方向ナデ	密	内外面 灰色	良好	天井部に糸切りの痕跡有	
57	第23図 PL.9	B3 I層	須恵器 蓋	14.3 5.0	口縁部～ 天井部	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、沈線2条 内面：回転ナデ、天井部不整方向ナデ	密	内外面 灰色	良好		
58	第23図 PL.9	B3 I層	須恵器 高坏	11.5 △4.8	坏部～ 脚部上半	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、底部一定方向ナデ	密	内外面 灰色	良好		
59	第23図 PL.9	西壁 I層	須恵器 高坏	— △9.7	坏部～ 脚部	外面：回転ナデ、2方向の筋状透かし 内面：回転ナデ	密	内外面 灰色	良好		
60	第23図 PL.9	A4・B4 I・II層	須恵器 高坏	14.0 10.2	口縁部～ 脚部	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	外面 灰色 内面 灰白色	良好		
61	第23図	B3 I層	須恵器 蓋	※11.4 3.5	口縁部～ 天井部	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ後一部ナデ 内面：回転ナデ、底部不整方向ナデ	密	内外面 灰色	良好		
62	第23図	A4・B3 I層	須恵器 壺	— △10.1	頸部～ 体部	外面：回転ナデ、肩部以下カキメ、沈線 内面：回転ナデ	密	内外面 灰色	良好		
63	第23図	A4・B4 I・II層	須恵器 壺	11.6 △13.7	口縁部～ 体部	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	内外面 灰色	良好		
64	第23図 PL.10	A3・B3 I・II層	須恵器 甗	13.7 △3.6	口縁部	外面：回転ナデ、波状文 内面：回転ナデ	密	内外面 灰色	良好		
65	第23図	A4 I層	須恵器 甗	※8.2 △4.7	口縁部～ 頸部	外面：回転ナデ、波状文 内面：回転ナデ	密	内外面 灰色	良好		
66	第23図 PL.10	A4・B4 I層	須恵器 甗	※19. △7.2	口縁部～ 肩部	外面：口縁部ナデ、肩部以下平行叩き後カキメ 内面：口縁部ナデ、頸部以下同心円当て具痕	密	内外面 灰色	良好		
67	第23図 PL.10	A3・B3 I層	須恵器 不明	— △6.1	底部	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	注口・把手有	

表8 坂長第8遺跡瓦観察表

遺物 No	挿図 PL	遺構 層位	種別 器種	法 量			文様・調整	胎土	色調	焼成	備	考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)						
68	第24図 PL.10	A3 I層	瓦 平瓦	△8.6	△7.5	2.3	凹面：布目 凸面：縄叩き	密	にぶい黄褐色	良好		
69	第24図 PL.10	A4 I層	瓦 平瓦	△7.3	△5.9	1.4	凹面：布目 凸面：正格子叩き	密	灰黄色	良好		
70	第24図 PL.10	A4 II層	瓦 平瓦	△20.4	△12.8	1.6	凹面：布目 凸面：正格子叩き	密	灰色	良好		
71	第24図 PL.10	A4B3・4 I層	瓦 平瓦	△26.3	31.6	1.9	凹面：布目 凸面：正格子叩き	密	灰白色	良好		

表9 坂長第8遺跡石器観察表

遺物 No	挿図 PL	遺構 層位	型式	法 量			重量 (g)	石材	備 考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)			
S1	第21図 PL.8	SD2 下層	石鏃	1.9	1.6	0.3	0.7	黒曜石	
S2	第21図 PL.8	SD2 下層	石鏃	2.4	1.7	0.6	2.2	黒曜石	
S3	第21図 PL.8	SD2 下層	石鏃	2.1	1.4	0.2	0.5	サヌカイト	
S4	第21図 PL.8	SD2 上層	石鏃	△2.8	1.9	0.6	2.4	サヌカイト	
S5	第21図 PL.8	SD2 上層	楔形石器	3.8	2.2	0.8	7.3	サヌカイト	
S6	第21図 PL.8	SD2 下層	石鏃	△10.5	△7.6	3.3	303.0	玄武岩	
S7	第21図 PL.8	SD2 下層	石鏃	△8.8	3.6	0.9	46.0	緑色片岩	
S8	第21図 PL.8	SD2 下層	石鏃	13.1	5.5	2.2	201.0	デイサイト	
S9	第25図 PL.11	A4 II層	有茎尖頭器	4.2	2.8	0.6	5.2	サヌカイト	
S10	第25図 PL.11	B2 II層	石鏃	2.1	1.7	0.4	0.7	黒曜石	
S11	第25図 PL.11	A4 I層	石鏃	2.5	△1.5	0.4	0.9	サヌカイト	
S12	第25図 PL.11	A3 I層	石鏃	1.2	1.2	0.4	0.3	サヌカイト	
S13	第25図 PL.11	A4 II層	石鏃	2.6	△1.7	0.5	1.5	サヌカイト	
S14	第25図 PL.11	排土	石鏃	3.1	1.1	0.5	1.3	サヌカイト	
S15	第25図 PL.11	- 地山上面	削器	6.8	11.4	1.2	130.0	サヌカイト	
S16	第25図	A3 I層	楔形石器	1.8	2.3	0.8	2.4	黒曜石	
S17	第25図 PL.11	A4 II層	楔形石器	4.6	△3.7	1.0	20.2	サヌカイト	
S18	第25図	A4 II層	石鏃	△6.9	△12.8	2.9	248.0	デイサイト	
S19	第26図 PL.11	B2 II層	石鏃	22.9	9.0	4.0	1,150.0	緑色片岩	
S20	第26図 PL.11	A3 I層	石鏃	9.8	6.2	1.6	140.0	デイサイト	
S21	第26図	B3 I層	敲石	9.8	△5.5	4.2	474.0	花崗岩	
S22	第26図	A4 I層	砥石	△8.6	△8.6	△3.6	256.0	凝灰岩	
S23	第26図 PL.11	A4 II層	石包丁	△5.0	△4.4	0.4	14.3	粘板岩	
S24	第26図 PL.11	A3 II層	石包丁	4.8	5.2	0.5	16.9	粘板岩	再加工品
S25	第27図 PL.11	A3 I層	磨製石斧	△13.5	6.5	4.0	692.0	閃緑岩	
S26	第27図 PL.11	-	磨製石斧	10.4	5.3	3.1	269.0	閃緑岩	

表10 坂長第8遺跡玉類観察表

遺物 No	挿図 PL	遺構 層位	種 類	法 量			重量 (g)	材 質	備 考
				外径 (mm)	内径 (mm)	厚さ (mm)			
J1	第21図 PL.8	SD2 上層	小玉	5.2	1.4	4.9	0.1	ガラス	淡青色
J2	第27図 PL.11	A3 I層	白玉	4.7	1.5	2.3	0.1	滑石	黒灰色

表11 坂長第8遺跡木製品観察表

遺物 No	挿図 PL	遺構 層位	種 類	法 量			備 考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	
W1	第28図 PL.12	A4 I層	漆器椀	口径 ※14.8	器高 △3.5cm	-	外面：黒漆、内面：朱漆
W2	第28図 PL.12	B3 I層	漆器椀	-	器高 △1.6cm	高台径 ※8.5cm	内外面：黒漆

遺物観察表

遺物 No	挿図 PL	遺構 層位	種 類	法 量			備 考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	
W3	第28図 PL.12	A4 1層	漆器椀	△3.8	△4.7	—	外面：黒漆地に朱漆文様、内面：朱漆
W4	第28図 PL.12	— 地山	箱	17.9	6.5	0.9	
W5	第28図	A4 1層	曲物	△21.5	3.3	0.3	斜め方向の切り込み有
W6	第28図 PL.12	B3 1層	曲物	△17.9	△3.7	0.9	線刻状の使用痕有
W7	第28図 PL.12	A3 1層	曲物	18.5	△7.6	0.8	線刻状の使用痕有
W8	第28図 PL.12	— —	桶	21.3	△5.8	1.0	
W9	第28図 PL.12	A3 1層	桶	△25.9	5.6	1.4	
W10	第28図	B3 1層	槽	△24.6	△3.6	5.8	円形または楕円形、線刻状の使用痕有
W11	第28図	A4 1層	棒状木製品	△27.9	2.1	1.8	ほぞ状の突起有
W12	第28図 PL.12	C2 1層	棒状木製品	17.6	2.6	1.2	一端にほぞ有、白の引手か
W13	第28図 PL.12	C2 1層	不明	△14.5	4.2	1.9	栓か
W14	第28図	A4 1層	板状木製品	△8.4	3.5	0.5	穿孔1
W15	第28図	A3 1層	斎串	△22.6	3.0	0.9	
W16	第28図	A4 1層	不明	10.5	2.5	1.6	
W17	第28図	A4 1層	不明	10.0	1.9	1.7	
W18	第28図	A4 1層	不明	8.3	2.0	1.2	
W19	第28図	A4 1層	不明	10.4	2.3	1.6	
W20	第28図	B3 1層	不明	9.9	1.8	1.4	

PLATE

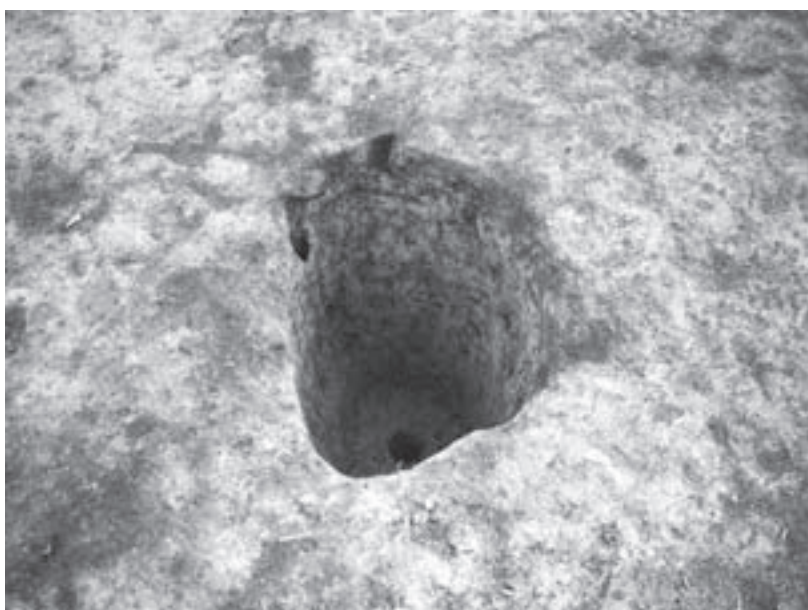
1 坂長武寿羅遺跡調査前状況
(東から)



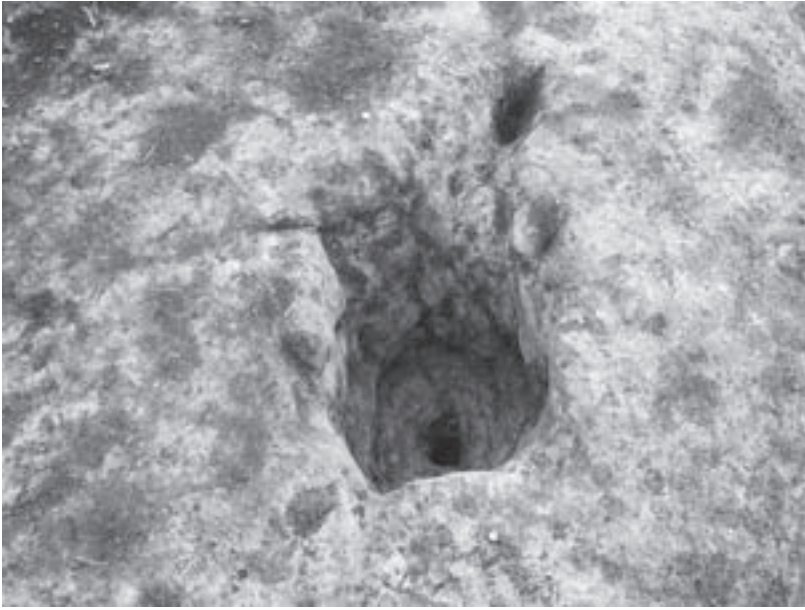
2 1区完掘状況 (東から)



3 SK1完掘状況 (北から)



PL.2



1 SK 2 完掘状況（北から）



2 2区完掘状況（北西から）



3 SS 1・2 完掘状況（南西から）



1 SS2P1 (東から)

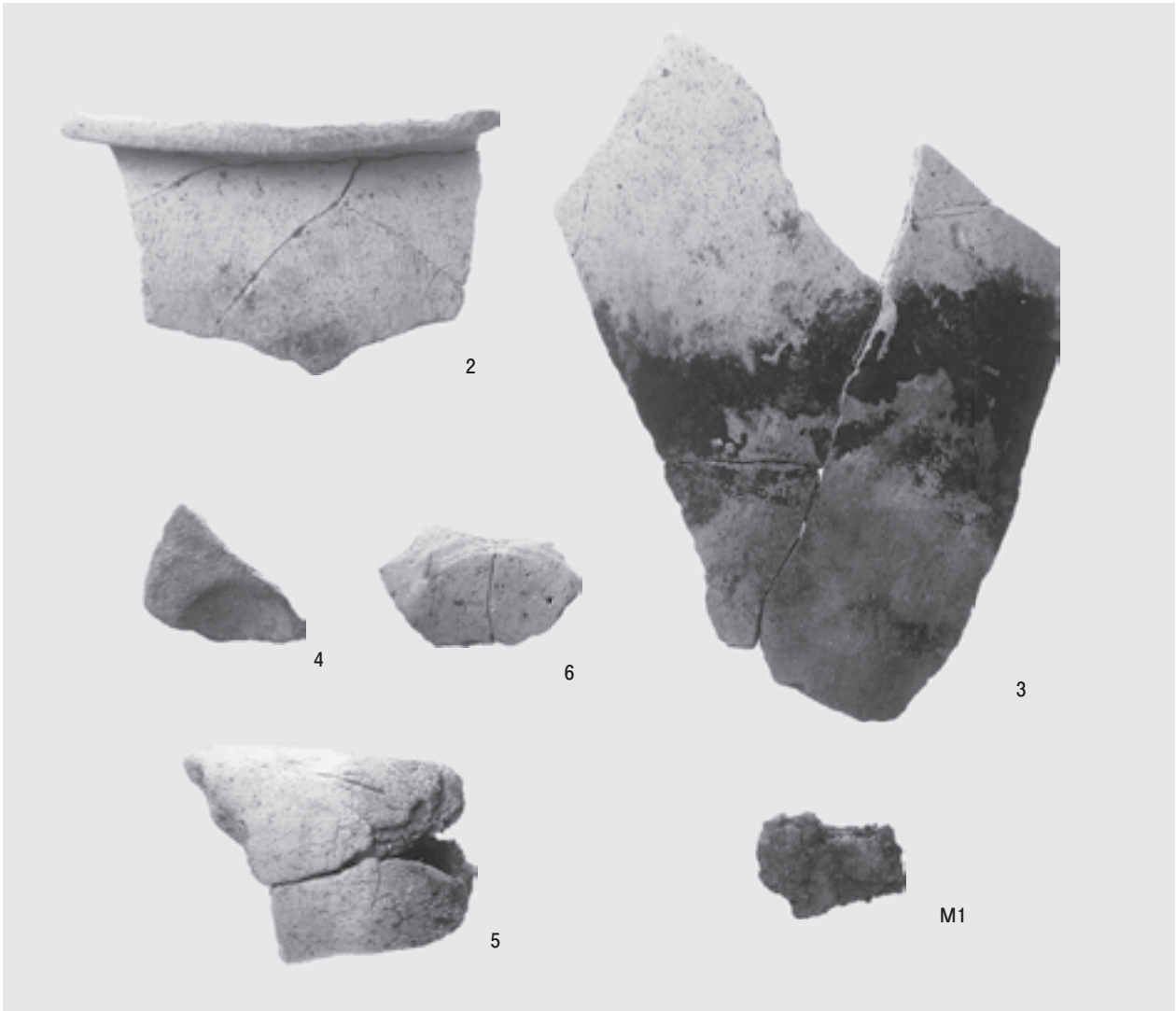


2 SB1完掘状況 (東から)



3 SA2断面 (東から)

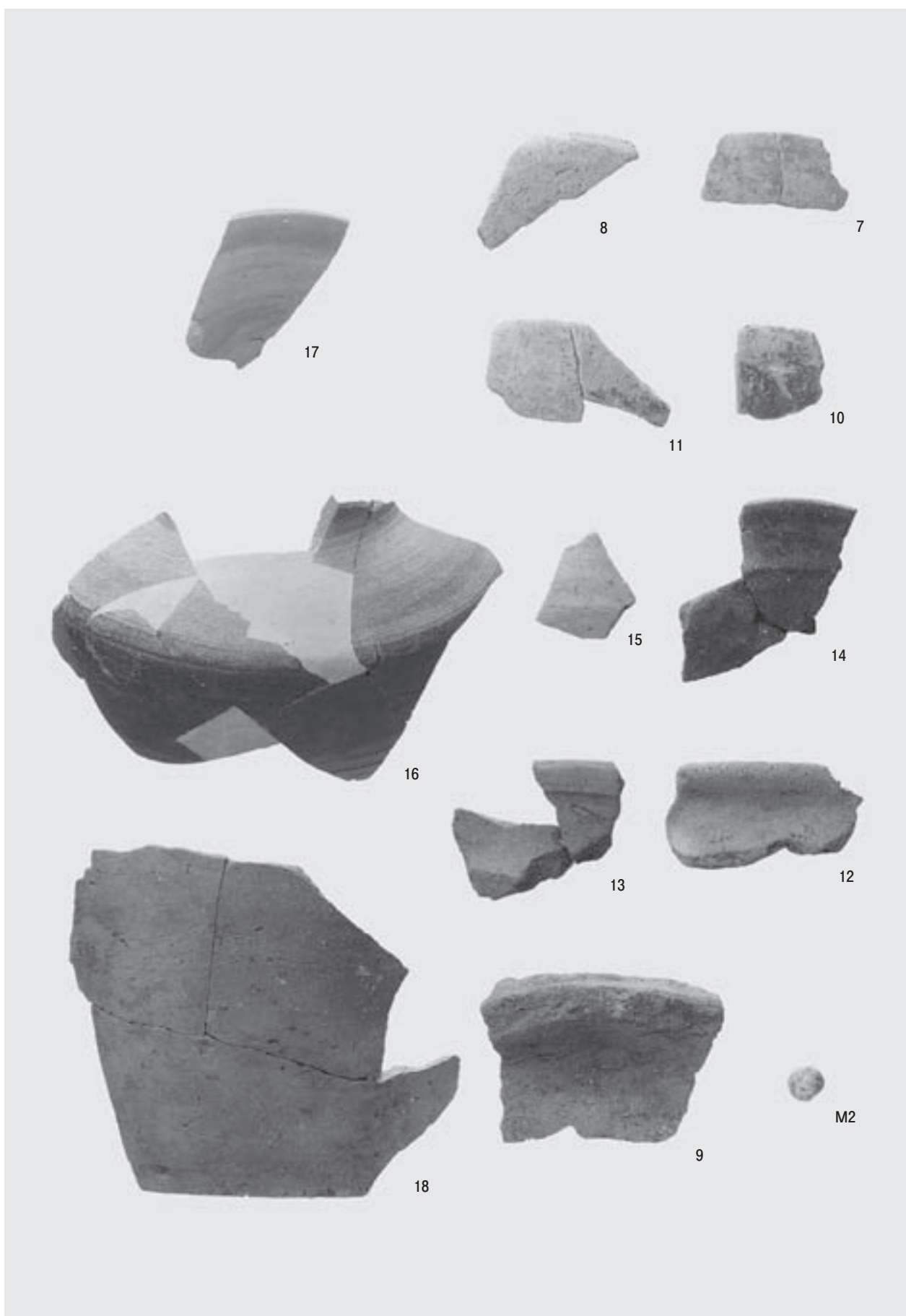
PL.4



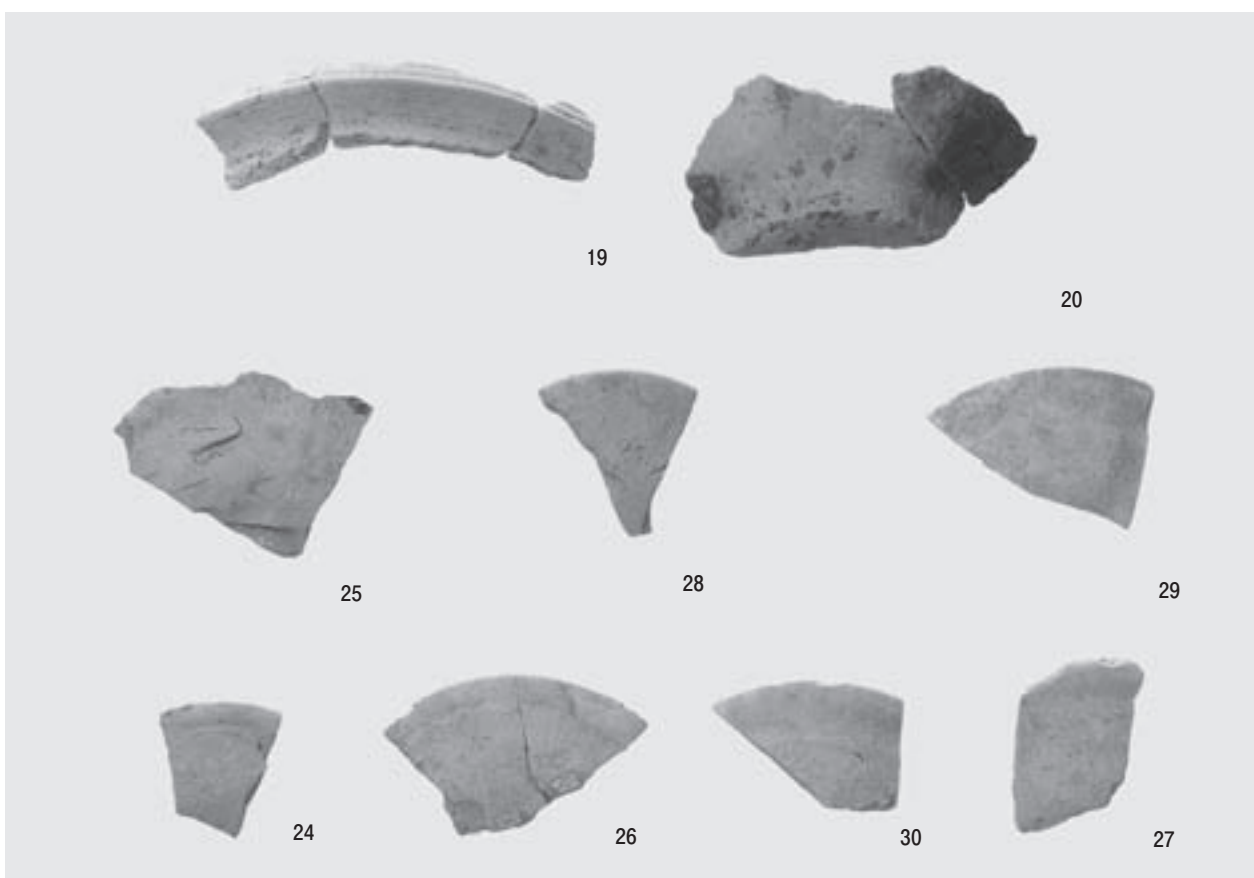
1 SS 1・2 出土遺物



2 SS 1 出土遺物



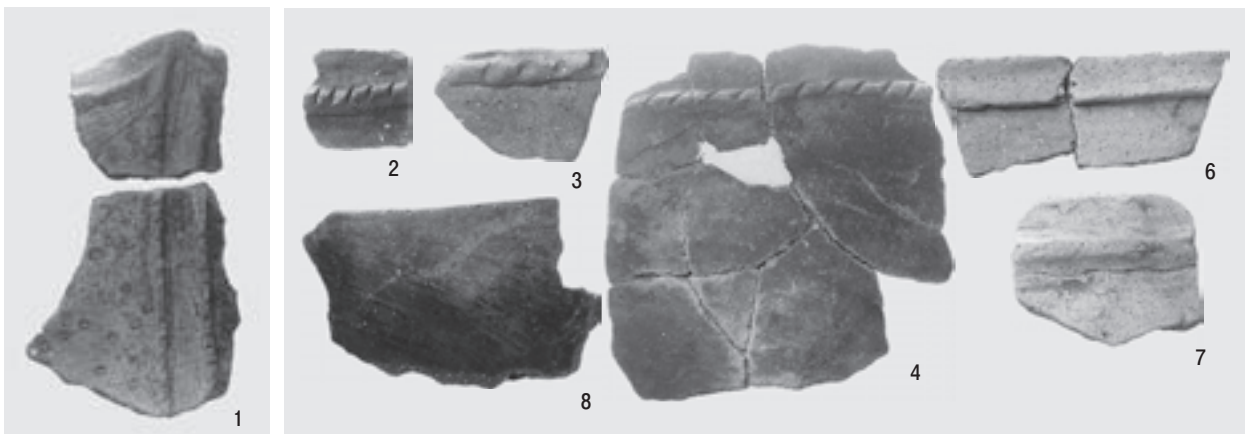
1 区包含層出土遺物



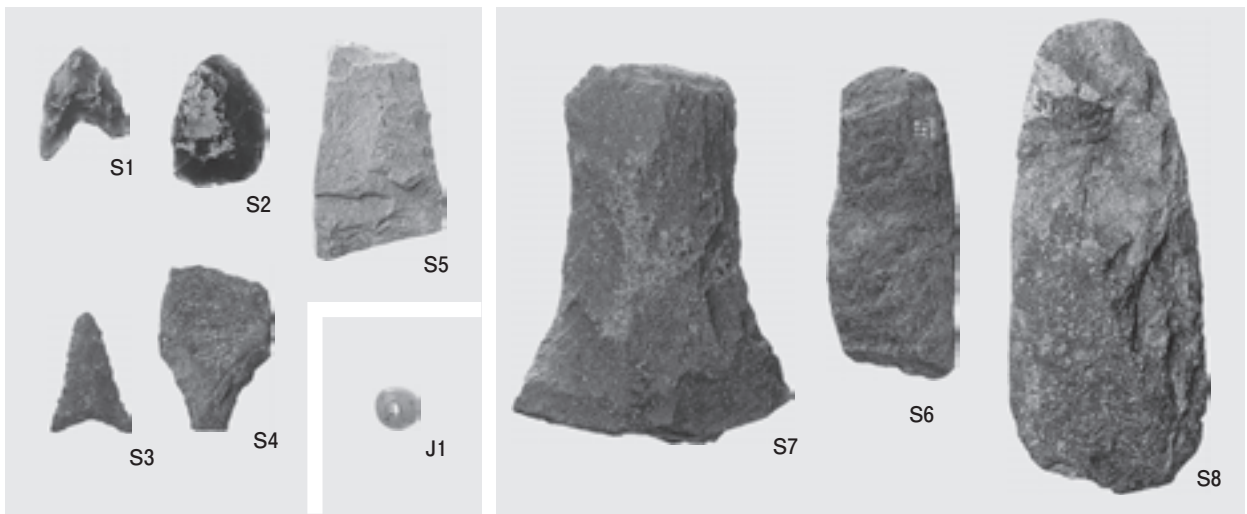
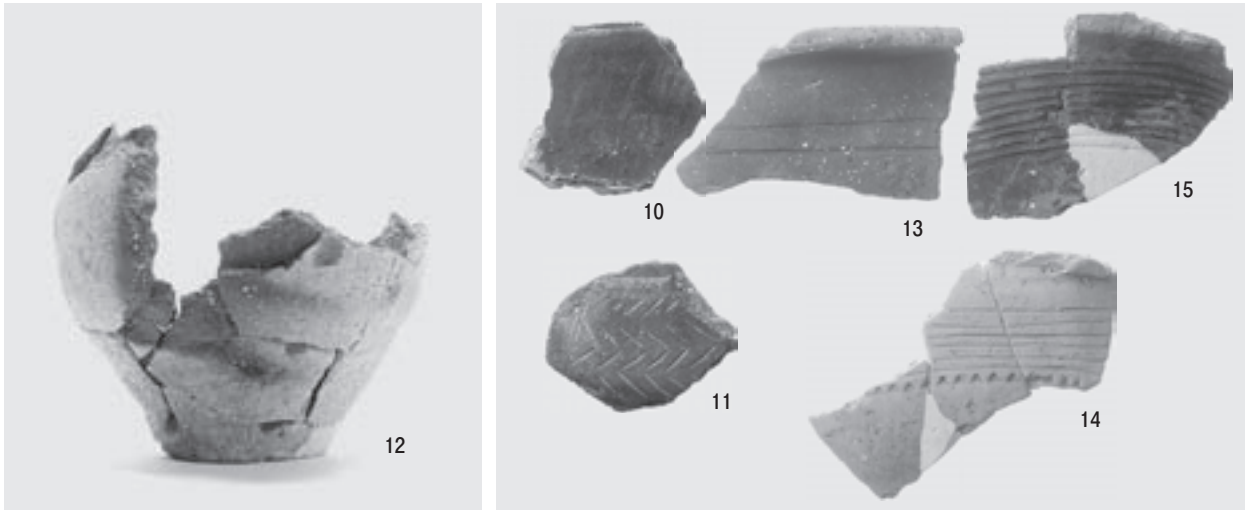
2区包含層出土遺物



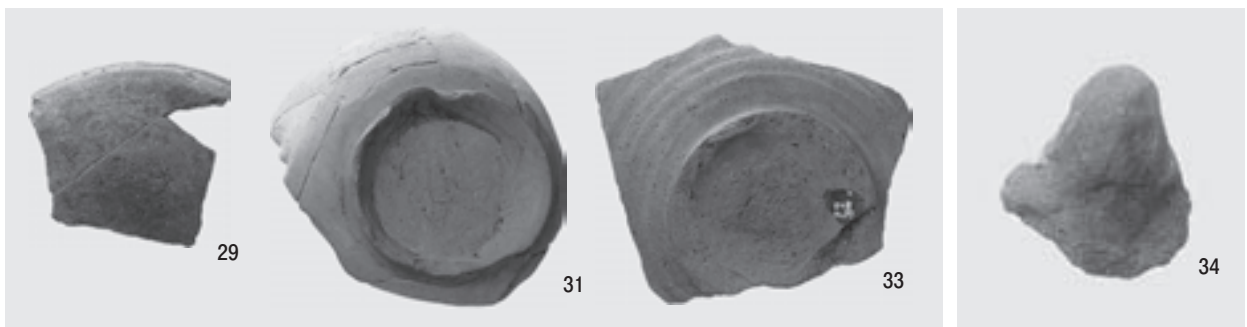
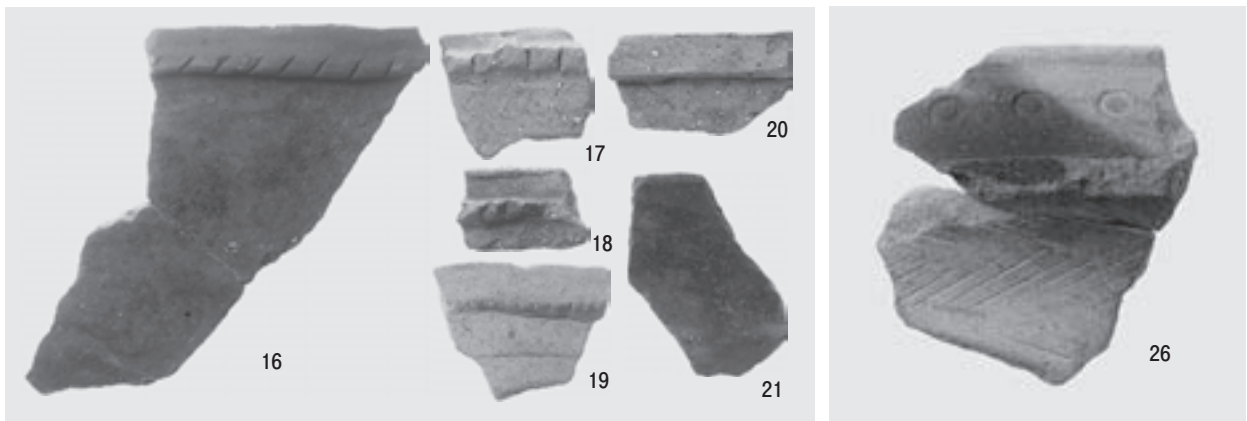
1 SD 2 完掘状況(南西から)



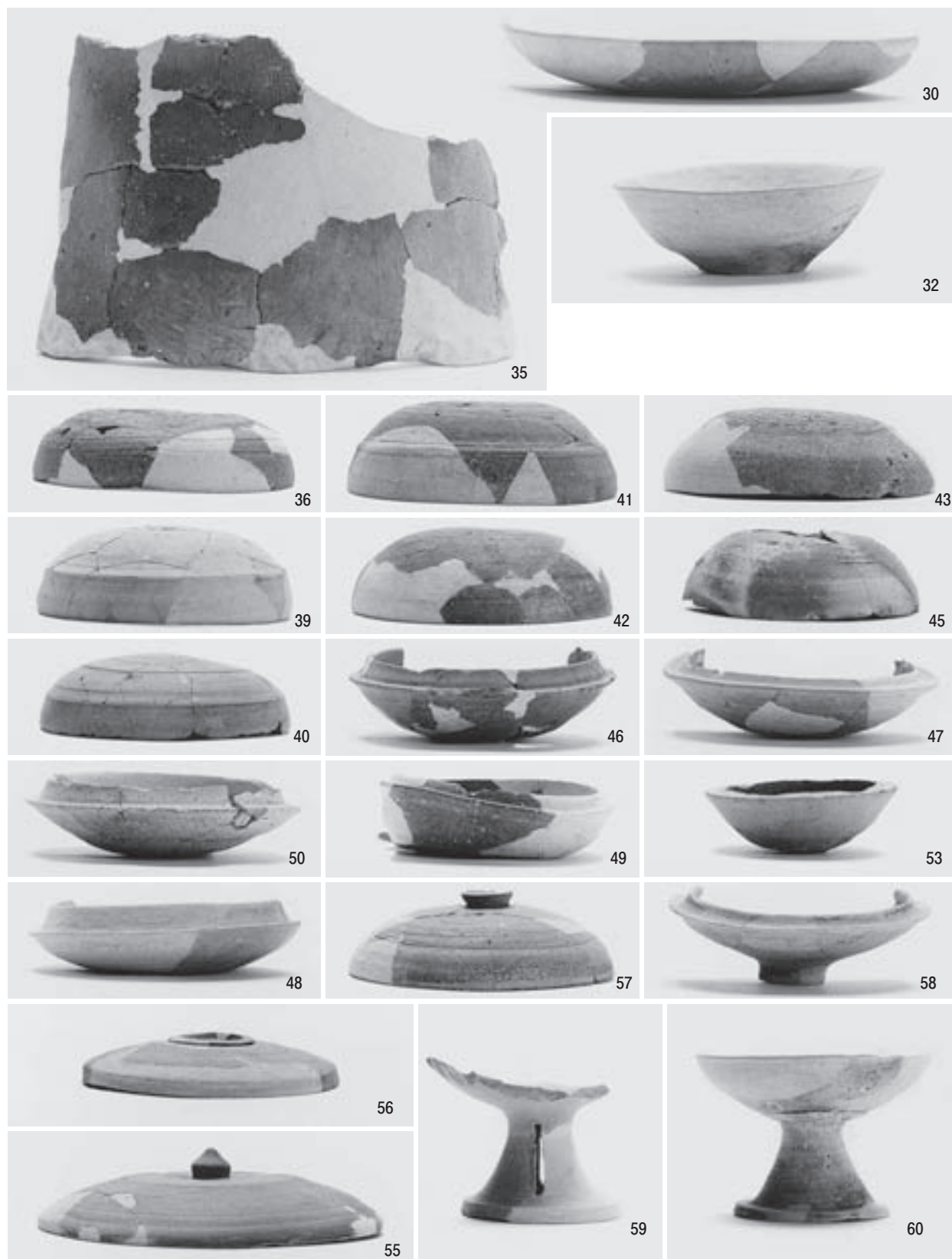
2 SD 2 出土遺物①



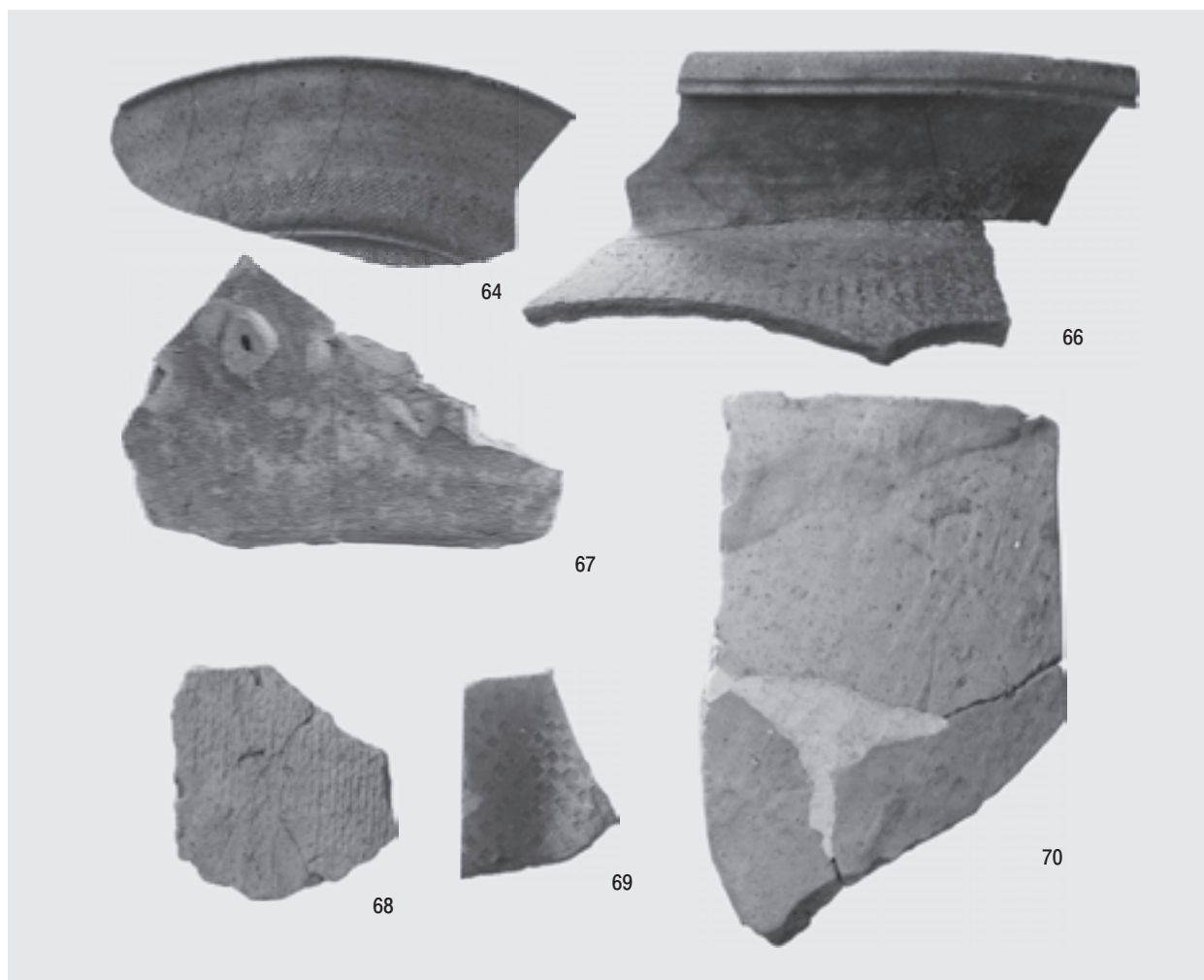
1 SD 2 出土遺物②



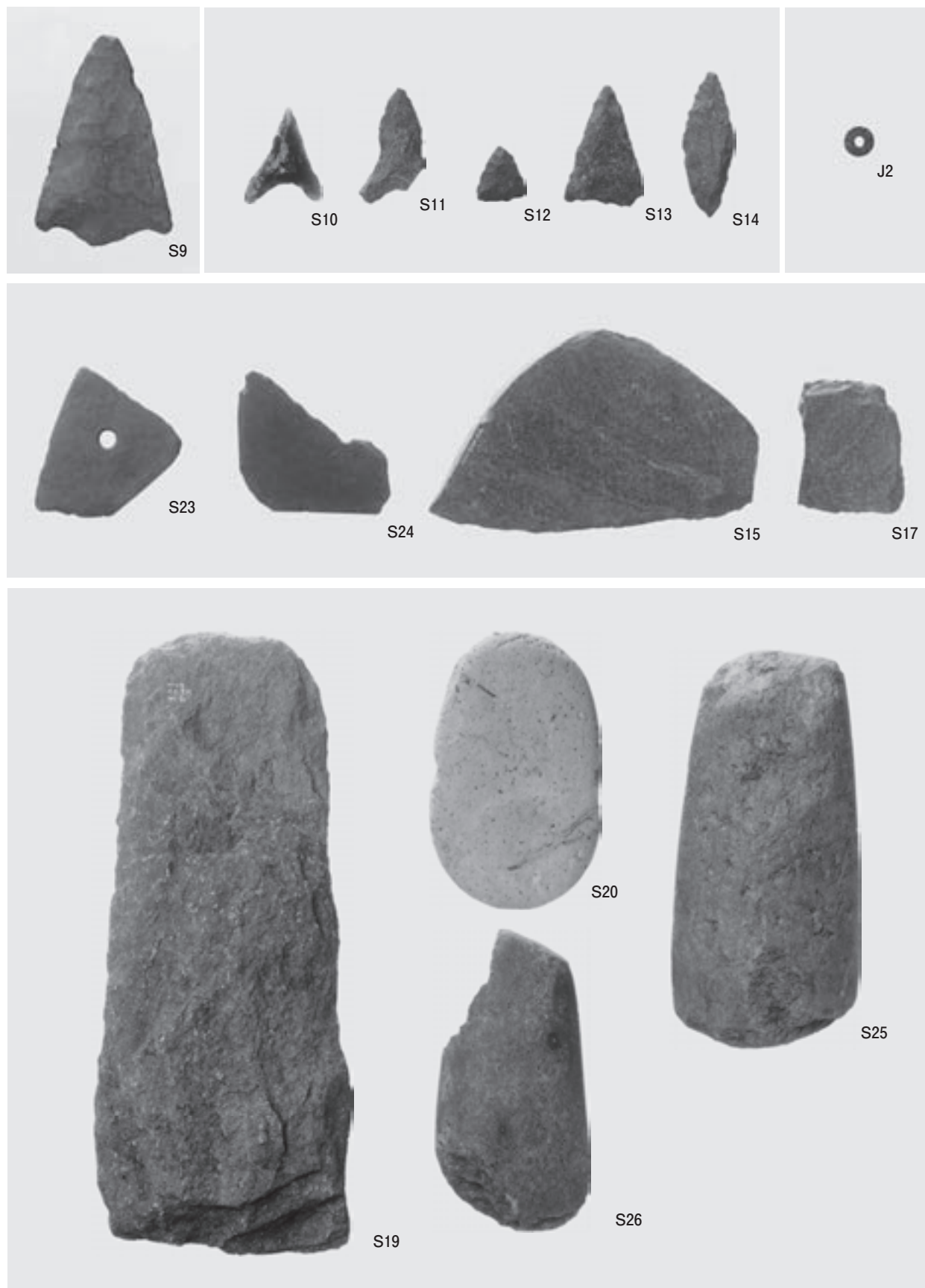
2 包含層出土遺物①



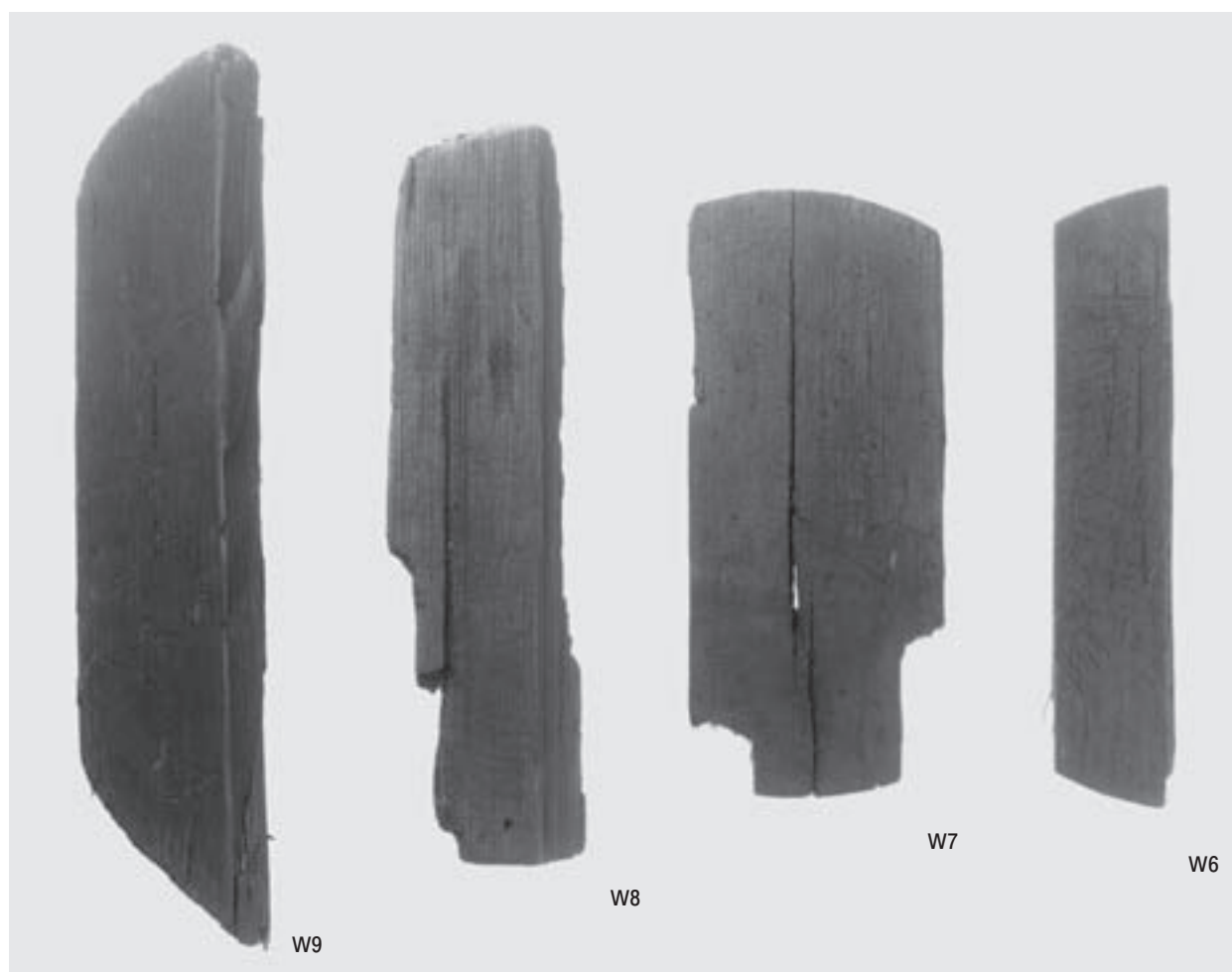
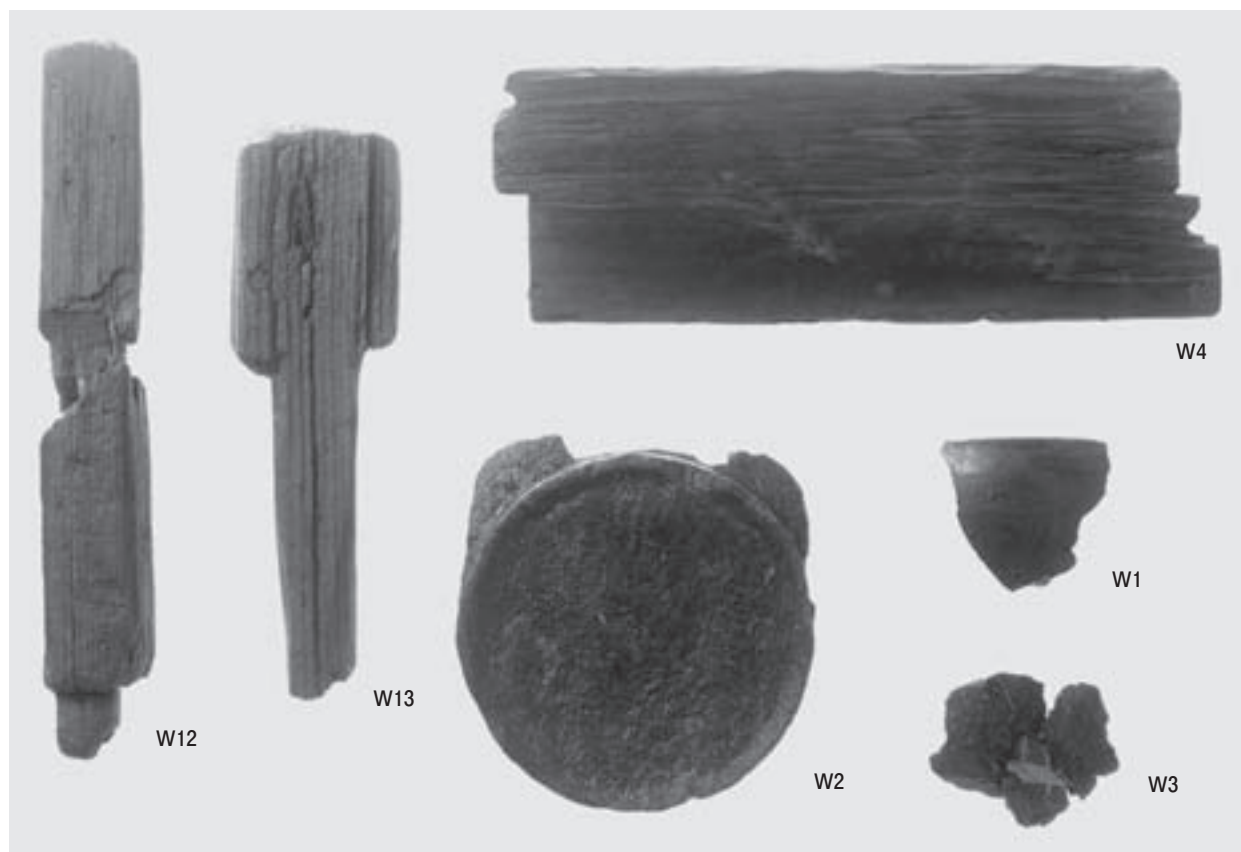
包含層出土遺物②



包含層出土遺物③



包含層出土遺物④



包含層出土遺物⑤

報告書抄録

ふりがな	さかちようぶじゅらいせき		さかちようだい8いせき2					
書名	坂長武寿羅遺跡		坂長第8遺跡2					
副書名	一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅶ							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	116							
編著者名	野口良也、玉木秀幸							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団 調査室							
所在地	〒680-1133 鳥取県鳥取市源太12番地				電話 (0857) 51-7552			
発行年月日	2012（平成24）年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さかちようぶじゅら 坂長武寿羅遺跡	とっとりけんさいほくぐんほうき 鳥取県西伯郡伯耆 ちようさかちようあざぶじゅら 町坂長字武寿羅 1985番地ほか	31390	1-376	35°22'35"	133°23'45"	20100209 ～ 20100319	740㎡	一般国道181号 （岸本バイパス） 道路改良工事
さかちようだい 坂長第8遺跡	とっとりけんさいほくぐんほうき 鳥取県西伯郡伯耆 ちようさかちようあざしもたかぶら 町坂長字下夕蕪 さこ 塚2267番地ほか	31390	1-22	35°22'48"	133°23'30"	20100614 ～ 20100726	820㎡	一般国道181号 （岸本バイパス） 道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
坂長武寿羅遺跡	その他	縄文時代		落とし穴				
		弥生時代 古代		段状遺構		弥生土器、土師器		
		中世		掘立柱建物 盛土遺構		土師器		
坂長第8遺跡	その他	弥生時代		自然流路		縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、瓦、 玉類、石器、木製品		
要約	坂長武寿羅遺跡では、縄文時代と思われる落とし穴2基、弥生時代、古代の段状遺構2基、中世の掘立柱建物1棟、盛土遺構2基を、そして坂長第8遺跡では、弥生前期の自然流路1条を確認した。このうち、坂長武寿羅遺跡で確認された中世の掘立柱建物、盛土遺構は中世に開山されたと伝えられる隣接する寺院との関連が窺えるものであった。							

鳥取県教育文化財団調査報告書116
一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ

鳥取県西伯郡伯耆町

坂 長 武 寿 羅 遺 跡
坂 長 第 8 遺 跡 2

発 行 2012年 3月23日
編 集 財団法人鳥取県教育文化財団 調査室
〒680-1133 鳥取県鳥取市源太12番地
電話 (0857) 51-7552
発行者 財団法人鳥取県教育文化財団
印 刷 勝美印刷株式会社